

歌仙家集

四

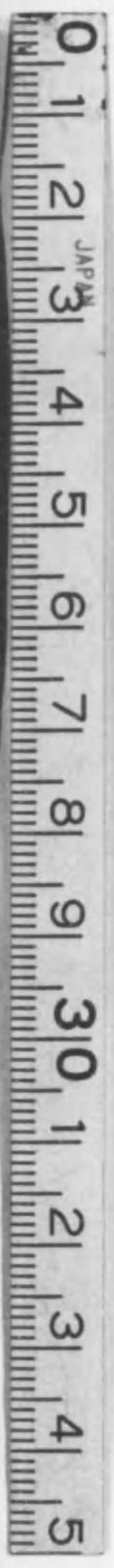
特40-159



\*1200800193452\*

特40

59



始





源

順

集 集 集 集



集 原 集



集 集 集



### 各 集 解 題

伊勢集 伊勢は伊勢守藤原繼蔭の女なり故に呼名を伊勢と云ふ伊勢の御とも伊勢の御息所とも云ふは宇多天皇に召されて行明親王を生み奉りしが故なり女の中にては雙なき歌仙なり自撰の集ありし趣拾遺集に見えたれども今傳はれるはそれにかあらじかよく考ふべし

赤人集 取るにも足らぬものなり三十六人集の中なれば存じ置くのみ

遍昭集 花山の僧正と稱せらる俗名を良岑宗貞と云ふ歌は貫之にも優れりささへ云ふ人あり自撰の集こそ望まれね傳はれる歌今少し多からばこそ嘆かる

源順集<sup>しん</sup>順は後撰集の撰者即所謂梨壺の五人の一人にて又彼和名抄の著者なり和漢の學者なる上に王孫なれども官位は五位能登殿守に過ぎず此集はまさしく自撰なり身本宗貞と云ふ事あり

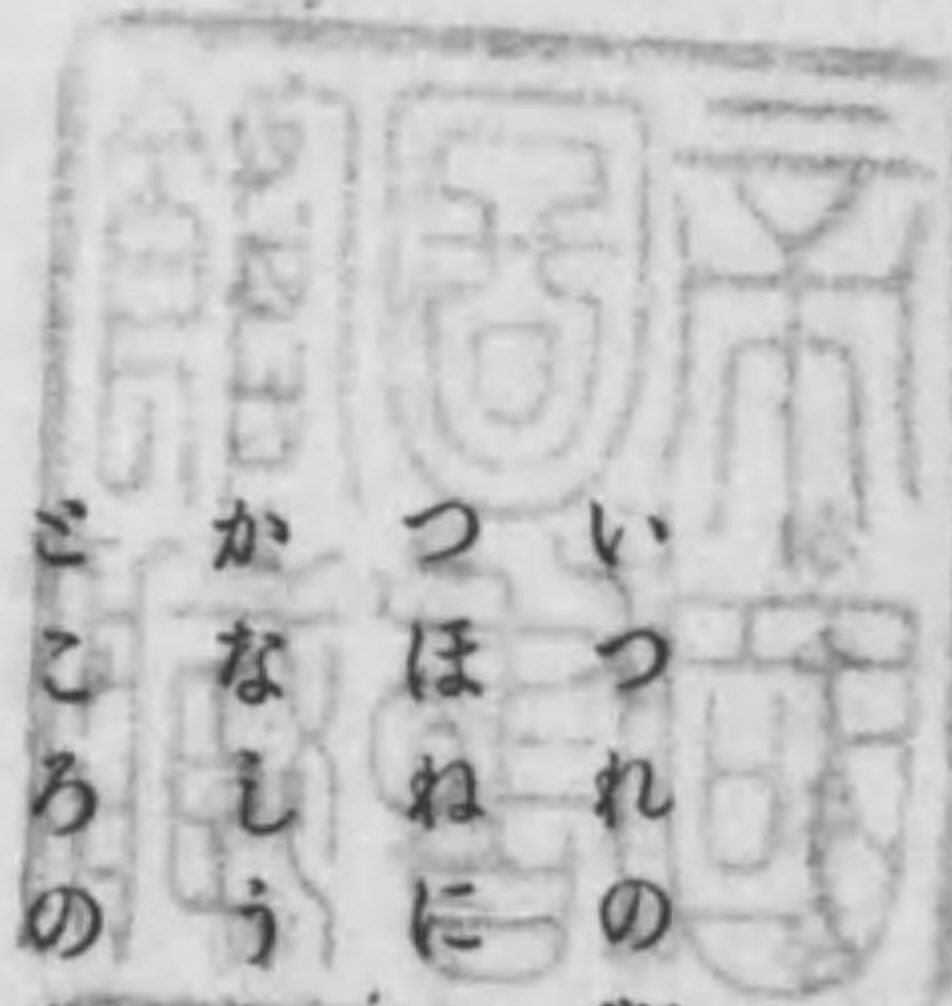
のみ

春入集 尋ふことと云ふは三十六入集の中より別冊に置く  
しうきふんじ

古くは強許集と云ふはこれと今新撰の古くはこれと云ふは  
王子主心集と云ふはこれと云ふはこれと云ふはこれと云ふは  
源順集と云ふはこれと云ふはこれと云ふはこれと云ふは

谷集 桐 野

伊勢集



又あるに...  
いつれの御時にかありけむ大みやす所ときこゆる御  
つほねにやまごにたやある人さふらひけりたやいと  
かなしうしてをここなごもあはせさりけるをみやす  
ごころの御せうご年ころいひわたり給ふをえはしは  
さらにきかさりけるにかとありけんたやいかうい  
はんごなけきたりけるを年頃へにけれはきつつけて  
けりされごすくせごそありけめごごにいはさり  
けりたごわかき人はたのみかたき物そごいひけるほ  
ごに時のたほいまうちきみにむごにさられにけりた

やもされはこそなごいひけれはこの女はつかじごた  
もふほごにこのをさこのもごより人たこせたりける

この女のたやは五てうわたりなりける所にきてかき  
の紅葉にうたをなむかきたりける

人すますあれたるやとを来て見れは今そもみちのこのははにはきたりける  
女いご心うきものからあはれにたほえけれはおまさりけるい

後 なみたさへ時雨にそひてふる里はもみちのいろもささまさりけり  
こてねすもちの紅葉にさしてなむやりける人のむこ  
になりぬれはいまはよもごはしご思ひてもごありけ  
るやまごにいきてしはしあらんご思ひて女

古 三輪の山いかにまち見ん年ふごもたつぬる人もあらしごたもへは  
又あるほごに心ほそけにの給へれはいみしくあはれ

になむ尋ぬる人もごあるは人わろくもおはん人に我おくれめやいに  
古 もろこしの吉野のやまにこもるごもおはん人に我おくれめやいに  
男これをいごあはれご思ひてかへしをはえせてかくすい

よみたりけるひはのたごうきたるい  
よをうみの泡さきえにし身にしあれは恨むることそ敷まさりける

奈良坂のわたりにそたひつきてたこせたりける女の  
かへしい雨やえさ風さすけ入とまり宿ま人の門を

後 わたつみごたのめしごこのあせぬれは我そ我身のうらをうらむる  
こてそ〇〇なかにてかへしやりけるやまごに三月は

かりすむにさういしく寺めぐりせんご思ひてあり  
きけるにりうもむごいふ寺にまうてむ月の十日あ

まりになんありけるなれは其てらのありきまたきは

雲の中よりたち来るやうに見ゆ仙のいはやこいふは  
いたく年つもりていはの上のこけやへむしたりあは  
れにたふさくたほえて泪たつるたきにたごちすみじ  
らぬさちちにたくひなくめてたく見て物かなしく都  
思ひやられて石のもとにしはしなかわるにいこくら  
うなりぬ雨やふらんごすらんごともにある人々いそ  
きければ雨はふらし雪なごいふ程に雪さらはかりに  
てかきくらしふるある人々いさ歌よまむごいひけれ  
は  
たちぬはぬきぬきし人もなきものをなにやま姫のぬのさらすらん  
ごよみたりければご人よますなりにけりけふは○  
にいてごごしごいふ所にやごりぬかの寺のあはれな

見もはてす空にきえなてかきりなくいごふうき世に身の歸るらん  
ごひごりごちて袖もしほるはかりにそなきぬらしけり  
るがくる程につかまつりしごころよりはやのほらせ  
よごねほせ給ひければはやくのほりたまへもごより  
みやつかへをせよごそねもひしか君たちをさやは  
いひしごいふもしぬへくはつかしきてのほりてつか  
まつるあひたにこのをさごもみかはしてあはんごい  
へごあはてみかはす程にこのをさごのあになるをさ  
ごありけるいまはあの人によにもごはしなにかたの  
み給ふ我をねもへなごせちにいへご文はかりは見つ  
ともさらにあはてありけりかくいふけしきもごの人

はじりたりけり女さきにいでてせむさいなこのをか  
じかりけるをはなをなんですさひにむすひたりける  
このつらかりし人の来てよみたりける  
花すゝき我こそふかくたのみしかほにいてる人にむすはれにけり

こよみて物をききたるはやなさいひをり人がすなら  
ぬ身はなごうちさけたるさまにいひければをさこも  
あはれさたもひ女もあはれに思へさあはてやりつこ  
のあにのをさこなごかまあり給はぬかの人の心のつ  
らきをいてゐてたほすかさて

ひたふるに思ひなわひそふるさるゝ人のこゝろはそれそ世のつね  
かへし

後よのつねの人のこゝろもまたみねはなにかこのたひけぬへき物を

かくいひける程にあくるさしの神無月になんありけ  
るこのあに心いさつらければ吉野になんまかりぬる

ひたふるにいさひはてぬるものならは吉野の山にゆくへ知られし  
かへし

後我宿さたのむよしのに君しいらはたなしかさじをさしこそはせめ

けり人の心つらしさていふにはあらさりけりこの人

はたほむくすりのさわきにてなやましくなむし給ひ

けるよゐにあつまりてさふらふに此人のむこになり  
にしをさこきみのくら人さいふものしてあからさま

にまわり給へものきこえんこいひけりかへりことし  
けししはしさいふふることなにいひやりけるされ  
はをささしむるをささしむるをささしむるをささしむる

宵のまにはやなくさめよいそのかみふりにしこをうち拂ふへく

こよみたりける女かへし

わたつみさあれにしこを今更にはらはそてやあわさきえなん

非書ささいひけれは人をよゐの目さましてなむあはれかり

ける人かすこもせぬにそひて心さしいこふかくあり

心大で男文たさすれ返さこもせさりけれは

いなかにせんいひはなたれすうきものは身を心こもせぬ世なりけり

さばかりいひてやみにけりかくて世にさわきいてき

で大臣もなかされ給ひけるむこにて兵衛佐よりたち

まのすけにその人もなかされにけりたよりのありけ  
れは近くてはさたもひてやみにしをかくこほくなり  
たまふかあはれなることいひにやりたりけれは返

かけていへは涙の川のせをはやみこころつからやまたはなかれん

又たなし女をいふこもなくいはすこもなくこしをへ

てよはふをささありけり返事もせさりけれはこくら

さし月になさか見つたにの給はぬさいひけれはみ

たりけるをささ

たちかへりふみゆかさらは濱千鳥あさみつたにきみいはましや

平へ女かへし



年へぬるこそ思はずははまちごりふみごめてたに見すへきものは

夏なつのいごあつき日さかりにたなしをこのよみたり

夏なつの日のもゆる我身のわひしさにみつこひごりのねをのみそなく

返もせずこの女はこれかれいへごきかす宮つかへを

のみしてけるに時の御門めしつかひ給ひけりようそ

けしからぬ人のこをきかさりけるご心にもたやな

ごみこをそうみたてまつりける我れやみつからもい

さきになり給ひにけりうみたりけるをここみこはか

つらの宮といふところにたきてみつからはきさきの

宮にさふらひけるに雨のふる日うちなかめてゐたり

月つきのうちのかつらの人をこふとてや雨になみたのそひてふるらん

かくてみかごたり居させたまひて二年さいふに御く

うてごきくそきさいの宮にはたはしましけるささ

いの宮もつかうまつる人もかきりなうかなしごみた

て御さききこしめすつかまつりしなごめしいて御

この葉にたえせぬつゆはたくらんや昔はほゆるまごゐしたれは

御かへし

うみごのみまごゐの中はなりぬめりそなからあらぬ君か見ゆれは

ごなんこのみかごにつかうまつりてこうみたりし人

はよにさいはひなきものなりけれはうみたてまつり

し君はやつにてうせ給ひにけるいみじくかなしごた

もへごかひなししなむごたもへごしなれねは夜晝な

さわたるにこのみこになつたりし人のいへりける

思ふよりいふはたろかになりぬれはたごへていはん言の葉もなきそなき

目のごいへごさらにもものもたほえねは返事もせずなりに

けりかへりくる年の五月に時鳥なくをきとてひごり

かこちける

しての山こえてきつらんほごきすこひしき人のうへかたらなん

いまは心うかりてもごのみやつかへをなむしけるき

さきの御心はかきりなくめてたくなまめきて世にた

くひなくなんたはしましけるこのほごのさうしには

せむさいなごいごたかしううゑてなんすみける秋の

ころさごにいてたるに宮よりなごかいまてはまゐ

らぬたそくまるれは花のさかりもみなすきぬへしま

つむしもなきやみぬへかめりごなんのたまはせたり

ける御返事に

松むしもなきやみぬなり秋の野にたれよふごてかはな見にも來ん

御かへし

よふごしも聲はきこえてはなすごきのひにまねく袖も見ゆめり

又かくきこえさせたりけり  
人もきぬ尾花かそてにまねかれていごゝあたなる名をやたちなん  
御かへし  
わかまねく袖も知らてはなすゝき色かはるゝそれもひわひける  
うためすわくにかきてまゐらす  
古やま川の音にのみきくもゝしきをみをはやなからみるよしもかな  
このきさいの宮つねになやましくせさせたまひける  
をつひに六月八日にかくれさせ給ひにけるあさまし  
くいみしくかなしくてつかうまつりし人さなからあ  
つまりて夜晝なきこひたてまつるにのちの御わさの  
をりにやう／＼なりぬ雨のふる日心うしこいひし人  
しもになむこもりゐたりけるうへにひごあつまりて

御わさのくみをなんしけるしもなる人いごはよりは  
てたまふへかなりたたいまなにわさかし給ふこきに  
はあめをなん見いたしてなかめ侍るごいひあけたり  
けれはうへの御もごたちのかへしにはいごはよりは  
てていまはねをなんよりあはせてなき侍るごいひた  
にせられたれはしもなる人  
よりあはせてなくなる聲をいごにしてわか涙をはたまにぬかなん  
いごみそかに人にあひたりけるにやう／＼いひの  
しりけりをごこ此かうふりのはごに玉をなんいれた  
りけるそれかをに女のむすひつけたりける  
瀧つ瀬ごな<sup>の</sup>なかるれは玉の緒にあひ見しほごをくらへつるかな  
こ中宮の春宮の女御ごまたきこえし時たいたまはせ

て歌よませ給ひも御屏風のわか梅の花のたよりに

藤の物いひたる人さねもはせてゑにをこのゆきあひ

て物いひはしめたるを一のひらにかせ給へるを

見し人にまたもや逢ふごうめの花さきしあたりをゆかぬ日そなき

かへしご思はせて

ひごたひにこりにし梅の花なれはちりぬごきけはごまたも見なくに

櫻のさかりにたなしを

我やごにいさそはれよさくら花なにやまさごにかくれてかさく

かへし

よにさかぬものありせはさくら花人にあまねくつけさらましを

藤の花のさきたるごころををこのきて女をかい

ふりごひまみてよみていれたる

藤のはなけふみつるよりこむらさきむらごに色そふかくなりぬる

ごころををこの来て門にたちやすらふほごに花たちは

なほごにほごきすなくをきよて男よみて入れたり

ごにたてる我やかなしきほごきす花たちはなのえたに居てなく

かへし

なにかごもきみをはしらし時鳥きなからなくはさるにやはあらぬ

六月にはらへするごころに男きあひけり

年なかに我かなけきはなりぬれは世にみそくごもうせしごそ思ふ

かへし

なけきをはなてはらふるたほぬさは早川の瀬に流れいてにけりぬめ

七夕の日

あさまたきいそきひくらむけふのをに心なかさをくらへてしかな  
たなはたのほそきをうしてくらふらん心のかたやまつはたえせん  
秋の野にいてぬならはきくを花すきしのひにわれをまねきやはせぬ  
いつかたにありしらはか花すきはかなき空をまねきたてらん  
わたつ海の底にふかくはいれすとも時雨にたにもぬらさくらなん  
ふりさけぬ時雨はかりに山ひこのこゑをはかたみにはかなくきくかはすかな

あふ事のあけぬ夜ながらあけぬれは我こそかへれころやはゆく  
長恨歌の御屏風亭子院にはらせ給ひて其ころご  
もみち葉に色みえわかてすちるものはもの思ふ秋のなみたなりけり  
かくはかりたつる涙のつとまれはくものたよりをみせつけまじものを

かへり来て君をおもほゆるみせまじはちす葉のなみたの玉をたきあてそふみ  
玉すたれあくるもしらてねしものを夢にもみじこたもひけるかな  
くれなるにはらはぬ庭はなりにけり悲しきここののはのみつもりて

これはきさきにかはりて

じるへする雲のふねたになかりせは世をうみ中にたれかごはまし  
月も日もなぬかのよるひのちきりをはきとしほごにも又そわすれぬ  
きえしみににもまたもけぬへしはる霞かすめるかたをみやご思へは  
木にもたひす羽もならへてなにしかも波路へたてゝ君をきくらん  
ゐる雲のひさわきもせぬものならはみなみたはみをごなみたは流れさらまし

五條の内侍のかみの四十の賀清貫の民部卿つかうま  
つり給ひける御屏風のゑに 若菜つみたるごころに

春の野のわかなくらねごきみかため年のかすをもつまんごそ思ふ

梅の木のかたはらなる竹にたかむなぬくごころ

竹の葉にちりかへらなむうめの花ゆきのなかのをごるご見るへく  
みなそこたうつる櫻のかけ見れはこのかはつらそたちうかりける  
我やごのかけごもごたのむふちの花たちよりくごもなみにをらるな  
わくごのみめには見ゆれご我宿のいし井のみつはぬるまさりけり  
はるかなるほごにたあまふあしたつを我まへちかく波もよせなん  
みなかみごうへもいひけり雲よりたちくるごごも見ゆる瀧かな

鶴雲のにあそぶ  
たほ空にむれたるたつのさしなから思ふころのありけなるかな  
心して玉葉はかれこそここにひかりも見えぬあまにそありける  
波にのみひたれる松のふかみどりいくしほさかはしるへかるらん  
はるくご雲をさしてこく舟のゆくすゑさほくたもほゆるかな  
あまの家に煙たつごころ  
袖ぬれてあまのたく火はみえねはや雲さけふりのたちのほるらん  
たまふ御屏風の歌 子曰するごころ松のいごちいさ

きあり  
たふるより年さたまれる松なればひさしきものごたれかみさらん  
松に藤かゝれり  
頼みつゝかゝれる藤は松の木の子代てふごころもあかすそありける  
ある所に北の宮の御もきの歌ごも 竹たほかる所  
年ごごに生ひそふ竹のよをを纏てかはらぬいろをたれさかはみん  
をみなへし見るにころはなくさまでいご昔のあきそこひしき  
かりにくごいふに心の見えぬれはわかたもごにはよせごご思ふ  
かくらするごころ

としここに神をそいのるさかき葉の色もかはらて折らんと思へは  
御屏風のわかたてまつれるかきり

いにしへの心したえすゆくみつにわかまつかけもけふこそはみれ  
ねをたえて水にうきたるうき草はいけのふかさをたのむなりけり  
きさいの宮の五十賀せさせ給ふに御屏風にさらへ  
みそきつと思ふこそをそいのりつるやほよろつ代の神のまに  
七月七日たらひにかけ見るころ  
めつらしくあふたなはたはよそ人も影みまほしき物にそありける  
まつのでするにつるたてり

あらはなるかたにしもすむあしたつは千世をみよこの心なりけり

是もたなしきさいの宮の冬の御賀たほきたまこのつ  
かまつり給ふ 住の江のはまに鶴たてり

新古 住の江のはまのまさこをふむつるはひさしき跡をこむるなりけり

紅葉ちるまにさけのみしたるころ  
まごるする身にちりかゝるもみち葉はかせのかつくる錦なりけり  
やうせい院のみかこの七十の賀の具のうちみたりの  
はこにかめつるなごかきたり

露かゝるきくのなかなるあしたつは今いくたひの千代かそふらん  
式部卿のみやのせんさいあはせにくさのかう  
草のかういろかはりぬるしら露はこゝろたきてもたもふへきかな  
りうたん



新敷 風さむみなくなるかりかりかねの聲によりうたむころもをまつやかさまし

うめの花香にたにほへ春たちてふるあわゆきにいろまかふめり

新千 こころのみ雲のほごにかよひつゝこひこそわたれかさゝきの橋

ふるさはたれきかめごやうくひすの花よりさきに春をつくらん

亭子の御門のをのなるゆきよしかいへの梅の花見に

たはしますに

思ひいてゝ見にこさりせは梅のはな誰にほひの香をうつさまし

せきこゆる道さはなしにちかなから年にさはりてはなをみぬかな

宮に

さくら花あたにちらさぬことをたにわかこころにも任せてしかな

内の御屏風に 花見にゆくごころ

拾 ちりちらすきかまほしきを故郷のはなみてかへるひごもあはなん

まひ女

うつろはんことたにをしき秋萩にをれぬはかりもたけるつゆかな

京極の院に亭子のみかごたはしまして花の宴せさせ

給ふにまるれごたほせられしにまゐりて池に花なご

散りたるを見て

古年をへて花のかゝみごなる水はちりかゝるをやくもるごいふらん

古春水こごになかるゝ河をはなご見てをられぬみつにそてやぬれなん

又の目

けふまでもななけれぬるかな水上のはなはきのふやちりはてにけん

かへし

櫻はなひごさかりなるものなれはななかれてみえすなるにさるへき

亭子院歌合時

新 春 あをやきのえたにかゝれる春雨はいごもてぬけるたまかごそ見る

新 秋 あさみごりそめてみたれるあをやきの糸をは春のかせやごくらん

新 古 みつのもにあやたりみたる春雨や山のみごりをなへてそむらん

古 見る人もなきやまさこのさくら花ほかのちりなんのあそさかまし

あふこの君にたえにし我身よりいくらのなみたなかれいつらん

かすかのうたあはせの時

新 古 山さくらちりてみゆきにまかひなはいつれか花ごはるにごはなん

ぬれつゝもあめにはゆかん松かさはちごせの春をもらさくらなん

あるごころに五せつのころほりかはごのにひはのむ

ごごたはしましてたごしのひやかにごあるに

やをよめのをみの衣のきなからになれぬほごをはたれかごのはん

鏡のうらにつるのかたをいつけて侍りければ

ちごせごもなにかいのらん浦にすむたつの上をそみるへかりける

ふる家にあからさまにゆきて

見そめすはあらましものを故郷のはなにごころのごまりぬるかな

みやに

もろごもにありし音を思ひいてごはなみるごごにねこそなかるれ

からさきを題にて

古 なる花たきからさきてみえつるは河のはるごもかせそふきける

花のちりくるを家にて

たひ風のわかやごにしもふきこすはるなから空のはなを見まじや

春ものたもひけるころ

さくら花にほふごもなく春くれはなごかなけきのしけりのみする

しらたまをつむ袖のみなかるごは春はなみたもさえぬなりけり

四月朔みやにて  
いつこくまた春はいぬらんくれはては別れほこはよるになりき

かへし

兵衛佐門の命婦

くれはてはるの別のちかけれはいくらのほともゆかしこそ思ふ

忘れ侍りにける人を夢に見て

新古 春の夜のゆめにありつふと見えつれば思ひたえにしひとそまたる

風いたく吹く日櫻のいたく散り侍りしかは

風さへももてさわくかなさくら花ころごたにもちるにまかせて

古 五月にはなきもふりなむほごきすまたしきごきの聲をきかはや

夜ふけて時鳥の一聲なき侍りしに

後 ふた聲さきくごはなしにほごきす夜深くめをもさましつるかな

古 けさきなきいまた旅なるほごきすはなたちはなに宿はからなん

撫子のたもしろきをみてごなりにやるごて

拾 いくにも咲きはすらめご我宿のやまごなてしこたれに見せまし

新拾 ひとりのみぬるご夏その露けきはなみたにさへやいろはますらん

年をへて物いひわたりける人の

たのめつごあはて年ふるいつはりにこりぬころを人はしらなん

かへし

後 夏むしのしるくまごふたもひをはこりぬあかなしは誰かみさらん

はるかみのさいしやうのきたの方月のあかき夜かご

のまへをわたりたまふごてせうそこをのみいひいれ

給へりければ返事に

拾 雲ゐにてあひかたらはぬ月たにもわかやごすきてわたるごはみす

人しれすものたもふ時のむらさめはみよりすてふるまごご也けり

夏むしのたもひにいりてなごもかく我こころからもえむごはする

すさくゐんのつるを人の心にもあらてうちころした

りけるいま一つのつるのこひて雨ふる日いみじうな

きければ

後 なく聲にそひてなみたはのほらね雲のうへよりあめごふるかな

九月九日そのつるはしにける

後 菊のうへにたきあるへくもあらなくに千させの身をも露になす哉

大和にたやありてかよひける人後にたやなくなりけ

れはむかし戀しくて

後 ひごりゆくごごそうけれ故郷のむかしならひてみしひごもなみ

やまのへにて

後 くさまくらたひごしなれば山の邊ゆくみちのに邊にもしら雲ならぬみちやとりけりてわれやごまらん

伏見にて

なにたちてふしみの里といふごごは紅葉をごごにしけはなりけり

亭子のみかごの御まへにせむさいうゑ給ひて朝露た

けるをめてさせ給ひて歌よめごの給ひければ

後 うゑたてゝ君かじめゆふ花なればたまごみえてやつゆもたくらん

これは御かへし

しら露のかはるもなにかをしからんありての後も世はうきものを

せむさいうゑさせ給ひてうたよめごたほせられけれ

はしをに

うけたむる袖をしをにてつらぬかはなみたの玉のかすは見てまし

露たにもたぐも見えぬ秋の夜はふけしをにしにつきのなるらん

たもふ人をいまは見しなごいひて

いかなれはみしよなるらん秋霧のまかふまたにもかなしきものを

すさくゐんの七てうの兵このみやすところの八十賀

大たごのし給ひし屏風のわか

我宿もてりみつあきの月かけはななき夜みれごあかすそありけるもあるかな

すゝむしごりにやりてせんさいの中にはなちたりけ

る夜

指こいいつくにも草のまくらをすゝむしはこゝを旅ごもたもはさらなん

まわひはつるごきさへ物のくるかなしきはいつくを忍ふなみたなるらん

なき事を人のいひしころ

よごゝもにわかぬれきぬごなるものはわふる涙のきするなるへし

しからみに袖をさむれごせきごめすこほるゝ物はなみたなりけり

人にもものいひて猶つゝまじかりけるころ

違ひみてもつゝむ思ひのわひかなしきは人まにのみそねはなかれける

人のつらくなるころ

古人しれすたえなましかはわひつゝもなき名そごたにいふへきはまし物を

後人こふるなみたは春そぬるみけるたえぬたもひのわかすなるへし

物いふ人のちかくあらぬかたごせさりけるに

まふるさごにあらぬものから我ために人のこゝろのあれてみゆらん

亭子院の御屏風に 河の邊に紅葉あり

うきしつみ淵瀬なかるゝもみち葉にふかくあさくそ色はみえける

ひたはへてもるつなをのみひく時はいなはに露をこまらさりける

花のいごたもしろきを折りて式部卿のみやにたてま

つるごて

ふるさこのあれてなりたる秋の野に花見かてらにくるひともかな

御かへし

秋の野にわれまつ蟲のなくこいはとをらてねなから花はみてまし

人の

いはせやま谷のした水うちこのひひこのみぬまはなかれてそふる

かへし

瀧つせごはやからぬをそうらみつとも音をきかんと思へは

はらからのなくなりたる應ひわたるころ

後 ねもかけもあひみるこになすごきは心のみこそしつめられけれ

つのくにのなからのほじつくるごきとて

古 なるはなるなからの橋もつくるなりいまは我身をなにとたごへん

秋のころうたて人の物いひけるに

古 じるごいへは枕たにせてねしものをちりならぬ名の空にたつらん

ある大納言の家のひえさかもごにたごはごいふご

ろにいごをかしくつくりてありけるをみてやり水の

ほごりなるいはにかきつけくる音羽河に瀧なごたご

したりける

拾 音羽かはせきいれてたごすたきつせに人のこころの見えもする哉

人の心かはりけるころ繪に浪のこえたりけるを見て

かきつれたりける

まつかけてたのめしごはなけれごも浪のこゆるは猶そかなしき

ごもたちなる女つくしへ行くごて

後 ねさへつご我は袖にそせきそむる舟こすしほになさしごねもへは

かへし

たくれすそ心にのりてこかるへきわれはなみたをうみごなしつゝ

うたかひたることありて人のたまを給ひければ玉ならぬ身のうきことはきよけれどい

後きよけれ玉ならぬ身のわひしきはみかける物にいほぬなりけり

人のみつごたにいへごありしかは

夢にたにみゆごはみえしあさなくわかたも影にはつる身なれば

人のそらごをいひければ

うきごのかくわくごきは涙かはめのまへにこそちまさりけれ

人のたほつかなく侍りしに

昔さもこそはあひみるごごのかたからめ忘れすごだに云ふ人のなき

かへし

年ふれごいつもわれこそわすれすのはま千鳥ごはなきわたりけれつい

またかへし

違ふごごのかたにわりあるあしたつのすになく聲は聞えやはする

なみたにそうきてなかる水鳥のぬれてはひごに見えぬものから

にはごりにあらぬ音にても聞えけんあけゆくごきは我もなきにき

かへし

あかつきのねさめの耳にきしかご鳥よりほかのこゑもせさりき

御屏風の和歌七夕のかけみたるごころみぬまい

わかるてふ影をたに見したなはたは人のぬる夜をまちもこそすれ

人のもごにすみやるごて

年をへて思はずすみにありなからたきかはつかぬ物にそありける

たか鳥にこれるなけきをうちつけににほひもしらぬ我にたほする

屏風

やま里にやごらさりせはほごきすきく人もなき音をやなかまし

屏風 夜ひこよ物思ひたる女のつらつゑつきたる所  
 夜もすから物思ふ時のつらつゑはかひなたるさそ知られさりける  
 斧のえのくつはかりにはあらねともかへりみにたにみる人のなき  
 これも屏風に  
 をりつとそみまくそほしき藤の花かけをたにさやはなはをらん  
 式部卿宮うせ給ひて御四十九日はて家にかかると  
 悲しさそまさりにまさる人の身にいかにかほかるなみたさか知る  
 君によりはかなきしにや我はせむこひかへすへきいのちならねは  
 違ふことのかたみにこゑのたかからは我なく音ごも人はきかなん  
 人に

續後

身にかふる人にも我はなしてしかうしろやすきを見せんと思へは  
 めきためて数もみゆへくあら玉のをはかりたにも違ふよしもかな  
 夢ならて違ふこと難き世の中はたほかたさをたきすもあらまじ  
 我ことや雲のなかにもたもふらんあめもなみたもふりにこそふれ  
 身のうかふことをも知らて河中にたりにたちぬへきことちこそすれ  
 八條の大將の御四十賀權中納言つかうまつり給ひけ  
 ちこそふる松といふともうゑて見る人そかそへて知るへかりける  
 いはの上をすみかにしたる芦鶴は世をのさかにもたもふへきかな  
 をみなへしたほかる野に人かりするに  
 秋の野のはなのなたてにをみなへしかりにのみ來る人にをらるな



年の漢文をこせたる人をたかもごにあるそごひければ人  
のたやなくなりたりけるいかにごいひたりけるにた  
は空にこふてふごごのかたければ雲のうへにそさしてきこゆる  
かへし女  
演ちごりつはさのなきをさふからに雲路にいかてたもひかへらん  
家のちかごりければ立ちかへりてをこご  
つはさなき鳥ごなれごはごひさらすま近き枝にもすまんごそ思ふ  
此返事に女たごかみをむすひてやりたりければ  
なたの海きよきなきさにはまごりふみたくあごを浪やけつらん  
かへし女  
なたの海はあれやまさらんはま千馬たきつ浪なごまん方のあさきもごめよ

又返し  
なたの海あれまさるへきものならはごかれんる舟をうちよせよなみ  
返し女  
あれなから舟よすへくもたもほえすかたさためてし波のたごねは  
又をこご  
なみた川はまへによらぬわれうき舟はごちてふかせやふくごごそまて  
かへし女  
追風にかせはなほりてふきぬごもあまのいかりにごごまりやせん  
又をこご  
風ふけはゆかんゆかしごまつふねにいかりをたろす人はあらしを  
からにまかりける人の心かはりて侍りければ  
うらうへに思ひやらるる唐ころもからにうつりてきみかきたれは

玉かつらわかくることを君<sup>み</sup>はつらなからにもたえしこそ思ふ  
うちはへてくるを見ることも玉かつら手にたにかけし結ひしらねは  
雪のふる日  
神無月しくればかりは降らすしてゆきかてにのみなごかなるらん  
ゆきませて見るへきものをか<sup>か</sup>みなつき時雨に袖のぬれもこそすれ  
かへし

風ふけはごまらぬつゆの我身かくいかむごたもふごこのはかなさ  
春日野のわかなのたねはのこしてん千ごせの春もわれそつむへき  
いなり山ゆきかふひごは君か代をひごつころにいのりやはせぬ  
世の中のうきごなけく人  
はては身のふしのやまごもなりぬ<sup>る</sup>なりもゆるなけきの烟たえねは  
古あひにあひて物思ふ<sup>ごき</sup>ころの我そてはやごる月さへぬるごかほなる  
後いかてかく心ひごつをふたしへにうくもつらくもなしてみすらん  
堀河院にごさの藏人ごてさふらひける人みちのくの

すけつねくにさいふ人の女にてくたるに  
撞かまのうらこきつらん舟のたごきしかここにきくはかなしや

しほかまの浦こく舟のたごよりもきみをうらみのこゑをまされる

まぢわひて戀しくならはたつぬへく跡なきみつうへならてゆけ

君か代はつるのこほりにあえてきね定めなき世のうたかひもなく

みし夢の思ひてしるくよひここにいはぬをしるはなみたなりけり

せきうほうしのいつのかうしになかされけるころみ

後 わかれてはいつあひ見んほどかたもふらんかきりある世の命もなし

けつりこもさるもさる玉かつちたむけの神どいになるそうれしき

後 身のうさをさいしいはははしたになりぬへみ思へは胸のくたけのみする

後 いせの海に年へてすみしあまなれさかゝるみるめはかつかさりしを

ふしまろひまごふかたみをみるこてやなかれし衣に身は遅れけん

さためなきよをきく時のなみたこそ袖のうへなるふち瀬なりけれ

すなこたこせたれは  
ありそうみの濱にはあらぬ庭にても敷しらすこそうれじかりけれ  
こなりなる人のそこに見くらへよこてはなれこせた

春にさへわすられにける宿なれはいろくらふへきはなたにもなし  
かへし

われをこそわすれもはてめ梅の花さきしそこたにたもひいてなん  
やよひのふたつあるさし

さくらはな春くはされるさしたにも人のこころにあかれやはせぬ  
この中の宮の内侍の御もこに中宮の御屏風

もくし急の花のにはひはくれ竹のまよにもにすこきくはまここか  
かか

御かか

もくしきに流るる水のなかれてもかざるにほひはあらしこそ思ふ  
五月ふたつある年思ふ事ありて

五月雨のつづけるさしのなかめには物あへもひわひそめる我をなさき  
歌合のうたみき

なつ蟲の身をもをしまてたほもあらは我ごはねはん人め晴るみそ  
宵のまにみをなけはつるなつ蟲はもえてやひこにあふさききけん

こひくはてあはんと思ふゆふ暮はたなはたつめもかくやあるらん  
あふほども河をへたて

たこひなきものは我そなりぬへきたなはたつめも人目やはもる  
御かへし

たこひなきものは我そなりぬへきたなはたつめも人目やはもる



新玉封ていしのみかさものへねはもまむけるついでにかつひひり  
裏まべらなる家の花なご御らんしてかへらせ給ひにけりそ  
梅の花かたみの志さすちりにけりかこひてたにやのこさとりけん  
をしまさりつる

御かへも

春かすみたちなから見し花なればふみごめてけるあきそうねもき  
なくをたにふる人にせよやまひこのむかしの聲はきともじららん

水もせにうきぬるさきはむら波のうちのさのも見えぬもみち葉  
やま川に聲きくよりはぐれなるのひごめはかりもまつみてしかな  
あひ

くれなるのひさめはさこそそむれとも人はかりには薄くこそみれ  
たく露になにあかすこか秋の夜のなみたをさへはかりてそむらん  
またこへに咲くさきわくる露なればもみつる方にやこるなるへし  
あふきのみたれたるに  
むすひけん人のこころはあたなれやみたれて秋のかせにあるらん  
住吉のきしに來よするおきつなみまなくかけてもたもほゆるかな  
すみよしのめにちかくらは岸にゐてなみの數をもよむへきものを  
さきまさるなみたの色もかひそなきみすへき人のこのよならねは  
うくひすに身をあひかへはちるまでも我ものにして花はみてまし

今といひて別るゝたにもあるものをしらぬけさのいしたしさいて悲しき  
 さらはよさわかれし時ほどいにいはませは我もなみたにたほなましれましを  
 雲路をもしらぬわれさへ諸ごもにけふはかりこそなきわたりけるぬい  
 ねもたえすかれぬる人野邊いのむらさきはなへてと思ひし事そたえぬる  
 郭公なきでたちにしやこなれさすみかこたもへはなきつわひいつそぬる  
 わかやさは今そふるすこなりぬなる君ふるさこのさかの名なれは

山ひこのよそにこたへし聲なれさこさひじこそさひじかりけれ  
 よそなからへなんこそ思ふ戀ひしかきかなれての後は悔しあらいと思へは  
 いふ事も頼むるこどもあやまたは世にふるこどもあらしこそ思ふ  
 いふことこのたかはぬものにあらませは後うきこども聞えさらまし  
 後ちりにたつわか名きよめむ百敷のひこのころをまくらごもかな  
 なみたのみしる身のうさもかたるへくなく心をまくらにもせん  
 たごにのみ聲をきくらんあしひきの山むたみつにあらぬものから

此の人のもごに秋まかりて夜ふけてかへりてつこめてい  
 いせわたる川は袖よりなかるれはごしにこはれぬ身はうきぬなり  
 更けし夜の行あひの霜にうてしかごなごみに寒くあたらしりけん  
 ころをへてあひみぬごきはしら玉のなみたもあきは色かはりけり  
 くれなゐに涙うつるごきごしをはなさいつはりごわれれもひけん  
 くれなゐのなみたしこくは縁なるそてももみちご見えまじものを  
 山ごひごのちひさきごをこれ子にせよごてたごせたりけり

かたごきの人をみるたによるものはたごかたたいになるを侘じき  
 ありごたにかたみに見えぬ物ならは忘るゝ程もあらまじものを  
 をりはへてなきぬへらなり郭公しけきなけきのえたごにぬて  
 ひごのはらからのなくなりたるごふらふごて人  
 後ほごもなごたれもたくれぬ世なれごもごまるはゆくを哀ごやみる  
 そむかれぬ松のちごせの程よりもごもごごたにたはれせせご  
 ごもごごしたふなみたのかは水はいかなる色かしてなかるらん  
 又



春かすみはかなくたちてわかることも風よりほかにたれかこふへき

後めに見えぬかせに心をたくへつとやはかすみのわかれこそせめ

うきなから人を忘れぬことかたみまたこころこそかへらさりけれ

ものねもひ侍りけるころ野のやくるを見て

古冬かれの野邊さわかみをねもひせはもえても春をまたまじものを

いつみへ人のなかされけるになきさよふさよふさよふさよふ

なきこめぬ涙いつみにたえせすはなかるくみをそささめさりける

ふかきたもひをめつさいひし言の葉はいつか秋風ふきてちりぬる

後こころなき身は草葉にもあらなくに秋ふくかせにうたかはるらん

後

名にたてるねたになかれすい 程イはうき事はみのまたきえぬ草にさりける

ひこしれぬ我れもひにや秋の野のくさ本もあへすこかれちるらん

秋ならずあること の葉どもイの葉はみえなからつゆやは人のこころこはなる

よものあまもかつきわふなる白玉こみしまにそては海こなりにき

ぬれかへり玉葉かつけさあかなくに頼むみるめ みしみるイのたえてなけれは

三月つこもり雨のふりし日 はイうくひすの鳴きしかは

ゆく春をひさ輝なきてうくひすもよの間 たイなみたをさむるなりけり

秋の月ひこへにあかぬものなれはなみたを やイこめてうつしてそみる

古はるかすみたつを見すてゆく雁は花なきさこにすみやならへる

そこ そイこもしらて外にわたりたりける折にをさこかく

後たもひ川たえすなかる水 やイのあわのうたかた人にあはてきえめや

さくら花いろはひさしき枝なれさかたみに見れはなくさまなくぬかない

見ぬ人のかたみかてらはをらさりき身になすらふる色にしあらねは

よの中はいさごもいさや風のねこの秋にあきをふさごちこそすれ

又かたの月のまさかになるごきはもみちそむごもしくれさらなん

わかためになにのあたさか春かせのをむむさむれる花にしもふく

あさなく袖をやむほるきりす秋の夜すからなきあかしつさ

日のひかりかさねてませはむらさきの雲もふたへに今やなるらん

人わたすことたになきをなにかもなからの橋こみのなりぬらん

秋の夜にねてたきぬたるしら露はひさりある人のなみたなるへし

いごまたきすきぬる秋のかたみには枝にもみちそ散りのこりける

逢坂のせきはよるこそりまされくるをなごてわられたのむらん

かへし

かへし

かへし

もりませご夜は猶こそたのまるれぬるまもあらはこえんと思へは  
 櫻花ごむにかへねさうつせみのよをためしにて散るにそありける  
 なこりなくみかされにけるしら玉ははらふ袖にもちりたにもあす  
 ころもからもりか道たつねわひてふせるをさこそ  
 やへさつる道は夢にもまさふらしぬるたまにたにあふご見えねは  
 かたみにもみをしる雨のふりしかな我もせきあへす君もこしかは  
 ぬれかまふせかれぬみをにひかれてや我さへうきて流れよりける  
 目も忍ひたる人ごふたりして  
 夢さてもひごにかたるなしるさいへは手枕ならぬまくらたにせず  
 いたつらにつもる涙のつとまれはこれにてけりごひはまもものを

わすらるゝわかみをしらて濱千鳥ふみごめてよごたのみけるかな  
 面かけは水にうきてもみえずやはころにのりてなかれしものを  
 心にやのりてこかれしあふみてふ名はいたつらにみつかけもせ  
 違ひもみぬさしのわたりにぬれくれは身をふかすらぬ心ごや見る  
 わかごこく物は思はしたなはたもあふなぬかをしまつごたもへは  
 忘るてふごごをもしらぬたなはたや年のわたりをまちて違ふらん  
 かきりなくたもふ涙やかはご見てわたりかたくはなりまさるらん  
 ごごさたむごごそ身にはかたからめ夢はかりには猶もみえなん  
 かくれぬのそこの下くさみかくれてしられぬ戀はくるしかりけり

かくれぬにかくるはかりの下草はなかくらしともたもほゆるかな  
 宵のまに身をなけはつるなつ蟲はきえてやひとにあふさきくらん  
 うくひすのなく音をまねふ山ひこを友ありかほにもとめつるかな  
 うめの花ちるてふなへにはるさめのふりてつとなくうくひすの聲  
 あむひきの山をさほしとほさきす里にいでてもねをのみそなく  
 ほさきす夜ふかきこゑは月まつとたきていもねぬ人そきさける  
 うちさくる山への聲をほさきすなにかき夜にこそきかまほしけれ  
 にほふかの君たもほゆるはななれはわかれしつへく袖そぬれぬる  
 ひたふるにきえは消えなん露のみの玉さはなすおき  
 水くきのかよふはかりをすくせにて雲のはるかにはてねさやさく

くも居にもかよふかなしき思ひつと人たすくせはたかまほしものを  
 霜ゆきなきえてうき身のもつくこそ袖たれぬまでさやけかりけれ  
 白露のたきてあひ見ぬとさよりはきえかへ花つとねなんこそ思ふ  
 みかさものにたはしましけるにをみなへしたほかり  
 てひはのたさとのたまへる  
 をみなへしをりけん枝のふし毎にすきにし秋をたもひいてやせし  
 女郎花をる香折ちすもいにしへをさらにかくへきことならなくに  
 わかそてにうつらはうつれ手もたゆくつみやいれまし撫子のはな

けり御かへむさおとて非やよ大のうてみやりのまじり梅子のおさ  
 こきかきりごとはつみいれて撫子にうつれる袖のいろをみせまし  
 茶漬津波中務の宮のごさをかしたまひてつるべもささるるさ  
 あつまごさ春のしらへをかりしかはかへすものごも思はさりけり  
 かへむさおとて非やよ大のうてみやりのまじり梅子のおさ  
 程もなくかへすにまさるごこのねは人もごかめぬみをやはつらん  
 又御かへむさおとて非やよ大のうてみやりのまじり梅子のおさ  
 かへして情あかぬ心をそへつればつねよりこゑのまさるなるらん  
 かへしむさおとて非やよ大のうてみやりのまじり梅子のおさ  
 常よりやそふるごころのかへりけんしらぬ聲なるこゑのきこゆる  
 御のち申つかさのみやのいへの池に舟をつくりてたろしは  
 舟もあつめてあそひけるにほうわうの御ちんまにねはしまさるる

むのしてよさりつかたかへちせ給ひなんごしける折によ  
 むさおとて非やよ大のうてみやりのまじり梅子のおさ  
 古水のうへにうかへる舟の君ならばごさそまじりさいはまじものを  
 花につけておとて非やよ大のうてみやりのまじり梅子のおさ  
 はなの色のさきを見すてきたるみのたろかに人は思ふらんやは  
 まじりわらひを人のもごにやるごて良の心もごさ  
 我ためになけきこるごもしらなくに何にわらひをたきてつけまじ  
 四月にさけるさくらの花につけておんの殿上人のも  
 御のち申つかさのみやのいへの池に舟をつくりてたろしは  
 もごに  
 ごまりゐて春こひしごやたもふらん花もかくこそたぐれたりけれ  
 こひさいはんご思ふ心のわりなさはしにてもしれよ忘れかたみに

かへしと思ふはけりしはしよふと云ふは  
もしもやさあひ見ん事をたのますはかくいふ程にまつそけなまし

人

濁江のすまむここそかたからめいかてほのかにかけをたにみん

返し

すむここのかたかるへきに濁江のこびちにかけもぬれぬへらなり

まつ人の見えぬからにやさまふけて月のいるにもねはなかるらん

九の宮のみやすところの御もこにこはこあはせのこ

ろはこに紅梅のつほめるをいれてまゐらせたるに

君にこしたもひかくれはうくひすの花のくしけもたしまさりけり

御かへし

みつのえのかたみこたもへは鶯のはなのくしけはあけてたに見す

ある人をたもひてをここ

見すきかすあらまし時はじつはたのたてぬきみたる思ひせましや

かへし

なほさりのゆくてにかゝる経緯はなからしこもたもほゆるかな

川のせにうきてなかるほごよりはころもの袖のぬれまさるかな

すむかたのしるしをまねく花すつきころわくごも風はふくらし

うちさくる山への聲はほごきすななき夜にこそきかまほじけれ

かたたかふごて京極なる人の家にいきてそのわたり

にしりたる人に

此さごのしるへに君かいてこなむみやこよりごにわれは來にけり

わか袖のかはりにをれる花すつきひごをまねくごしらさんやは

御門の御國忌に

はいない  
いごすきよふごりにもあらねごも昔こひしき音をのみそなく

人まちてなきつゝあかす夜なくはいたつらねにもなりぬへき哉

女四の宮かくれさせ給へるごふらひきこえさすごて

後こゝら世をきくか中にもかなしきは人のなみたのはてやしぬらん

御かへし

きく人もあはれごいふなるたもひにはいごゝ涙のつきすも有かな

又これより

こゝにたにかよふみならはなき人のなみたの程もきこえきなまし

御かへし

ゆきかよふ道はなくごもしての山ここの葉をたにゆきもこきなん

ひごにつかはしける

ひごにつかはしける

後なき人のかけたに見えぬやり水のそこになみたをなかしてそこし

ごなりなりける人のもごより九月八日きくにわたか

つけてたこせたりけるつごめてごりてやるにつけて

後数しれすきみかよはひをのはへつゝなたゝる宿のつゆごならなん

かへし

つゆたにも名たゝるやごの菊なれは花のあるしはいくよなるらん

故式部卿の宮の御てにてかきたまへるものを見て

なき人のかきごゝめけん水くきはうち見るよりそなかれそめける

ひごのたこせたりける

後いせの海にあそふ蜚ごもなりにしか波かきわけてみるめかつかん

返し

後たほろけの蜚やはかつく伊勢の海の波たかき浦にたふるみるめは

松山につらきなからもなみこさんごはさすかにかなしきものを

したにのき

この花をいかてちらさすいをかきをつらんさはかり風のふきしたにのき

かまつほくさ

山たをしまくしそほつはかりももりぬれは秋もからんごわかまつほくさ

うつせみをねもふに解したえさらはまたころも手に露はたきてん

あけぬごもたしそそねもふ唐にしきひごの心しかたならすは

中宮のうせたまへりし時かいねりこしごてけひるし

ふかくさに君まごはしてわふる身のなみたにそめる色ごやはみぬ

宇多の院よりねはれてひごのかたきになりけるひご

のもごに

のけさまに君にねはれしわれなれやせなかあはせに人のなるらん

かへし

はこつくりせなかあはせになりぬごもねなし心にむすはれそせん

かくはかりうしごねもふに戀ひしきはわか心さへふたつありけり

かへし

ふたつあらは今一度はごひてまじすへてころのなきごそ見れ

山あるに雪ふりかゝりて侍りけるを見て

足ひきの山あるにふれる白ゆきはすれるころものこゝちこそすれ

まてくるごさかたき人に七月七日

いむごいへは恐ふものから夜もすから天の川こそうらやまれけれ

山櫻を人にねくり侍るごて



後 君みよごたつねてをれる山さくらふりにしいろごれもはさらなん

後 物見にいてゝかたはらなる女車にいひかはして後

後 ほごときすはつかなるねをきゝそめてあらぬもそれご驚かれつゝ

後 四月つこもり はねならはしに枝うつりせよ

後 木かくれてさ月まつまのほごときすまた はねならはしに枝うつりせよ

後 をごこの人のもごにあるにやる

後 あすか川ふちせにかはるこゝろごはみなかみしもの人もいふめり

後 淵はせになりかはるなる世の中にわたりみてこそしらまほしけれ

後 又かへし

後 いごはるゝ身をうれはしみいつしかごあすか川をそ頼むへらなる

後 かへし

後 飛鳥川せきてごゝむるものならはふち瀬になるごなごかいはれん  
後 あちきなくなご松山になみごさんごごをはさらにたもひはなる

返し

後 岸ごほくしほしみちなはまつ山をしたにて波はごさんごそれもふ

後 さよふけてねられぬ程にほごときす君にしられぬねをそなきつる

後 ひごのもごに

後 人こゝろあらごのかせにさむければ木のめもみえす枝そしをる

後 物へゆく人に

後 たくれすそごゝろにのりてごかるへき波にもごめよ身はなくごも

後 返し

後 舟ならは天のかはまでもごめてんこきてんほごのなかにきえすは

かねてよりなみたそ袖をうちぬらすうきたる舟のこんごともへは

はるのころをははるのころをははるのころをは

後 青やきのいごよりはかけへてたるはたをいつれの山のうくひすかきる

むかしひと所なりし人の年ころいかにいひたるに

後 身ははやくなきものゝことなりにしをきえせぬものは心なりけり

もゝしきの花を折りてもみてしかなむかしを今にたもひくらへて

後 なみたにそうきてなかるゝ水鳥のうきてはひごに見えぬものから

つらくなりたる人に

わたつうみの深きころのかはらすは何かは人をうらみしもせん

こまひき

望月のこまひきわたす影みればたほつかなくて見えすそありける

たきたちたり

かきりなき心のたごすたきなればよにつたはりてなかれをそせめ  
どしのうちにいていはすなけきけん人のうへにそ我身なりけれ

このかへしにや

思ふことなくてやみにしなかをしもわか身の上になごかなんけん

をりつれは袖こそにほへうめの花ありさやこゝにうくひすのなご

よそにきくたもごのみこそそほちけれあまねく法の雨はそよけご

かへし

いへはこそ心をよのするのりの雨のそきくしるしにぬるきたもごか

家の人になして

後 飛鳥川ふちにもあらぬわか宿もせにかはりゆくものにそありける

たやにたくれて侍りけるころをごこのさひはへらさ

入りければ

なき人もあるかつらきをねもふにも色わかれぬはなみたなりけり

これもねなし恋歌の中なるなかかきの歌にて

きてみればなすの浦までよるかひのひろひもあへず君そうれしき

新古 みるまのうらよりをちにくく舟の我をはよそにへたてつるかな

新古 ねもひいつやみのを山のひこつ松契りしこはいつかわすれん

たきつ風ふけのうらにたつ波のなこりにさへやわれはしつまむ

あまふねのかよひしままに撞かまのほのほいたます思ひつきにき

伊勢の海しほやくあまのふちころもなるこはすれこあはぬ君かな

人しれすねもひするかのふしのねは我こそかくやまもゆるらん

みついろのうらの色の演ごはなりぬこも波のかひごかならんごすらん

あしひきのはらたにたふる玉くさはひさしくなりぬ夢にあひ見て

津の國のみつのほり江にあめふれはかきりもしらすたまる我こひ

いかてがごねもふ心はほりかねの井よりもなほそふがさまされる

あふみのやしかの浦風うらめしくたつねきたれごかひなかりけり

新古 石清水いはぬものから木かくれてたきつこころをひごはしらなん

ありさきくひよきのなたご聞じかは戀じがらすのせをそゆるらん

みまさかやくめのさら山さらしにむかしの戀ひしきやなそ

山しろのいはたのもりのほろそ原かつじやいもかいつちゆくらん

かた岡のあしたのはらをすきゆけは山ほごさすいまそなくなる

をちへゆくさち風かはにたれじかも色さりかたくみさりそむらん

新古 はつかにも君をみしまのあくたかはあくごや人のねごつれもせぬ

新古 さらしなやをはずて山のあり明のつきすもものをねもふころかな

新古 心ほの山さしてのいそにゐるちごり君かよはひはやちよごそなく

音にきくあまの橋たてはしたてごねよはぬこひもわれはするかな

夕されはさほの川原にゐるたつのひこりねかたき音をもなくかな  
 わすれなはよにもこしもの<sup>てはイ</sup>をかへる山いつはた人にあほんごすらん  
 たごなこの山のしたゆくさ<sup>てい</sup>れ水<sup>波イ</sup>あなまわれもたもふころかな  
 いはせやまたにのした水うち忍ひひこのみぬまになか<sup>はイ</sup>れてそぶる  
 わか戀はありそのうみのかせはやみじきりによする波のまもなし  
 春日野のなかのあさほ<sup>かほイ</sup>をたもかけに見えつと妹<sup>いまもイ</sup>かわすられぬかな  
 ひこはいさ我はかすかのしのすきじたはしけくそ思ひみたるよ  
 秋かせのたごはの山のたにみつのわたらぬそてもいろこきやなそ  
 さをしかもつまごふごきになりけりさか野の花もした紅葉して  
 たごは山木のしたかけにかほ馬の見えかくれせじかほそこひじき  
 難波かたはまへのあしをふみしたきなくらんたつは我ためにかも  
 いがこなるものさく山のたに水のにこらぬたごにきこゆなるかな

むさむ野のくさ葉にやこる白露のいくよあるへきものならなくに  
 たなごしのあまの小舟のあらし<sup>し</sup>にあなたごしなごひきり<sup>してイ</sup>て  
 磯に出てあさりする火のきえぬれはふけるの浦をたつねつるかな  
 音にのみありごきごつるみまむ野の龍はけふこそそてにたあけれ  
 いはくさる山井のみつをむすひあけてたかためをえき命さかえり  
 山川の<sup>やふ</sup>いはむろの野中のまつをひき結ひいのちしあらはかへり  
 みよむ野のやまのした風さむからむいもせのかはの波たかくみゆ  
 白なみのうちれさるかすうきまにたてる松たにねこそわ<sup>なかるイ</sup>なれ  
 かこの<sup>もなみイ</sup>あななかりし聞ひひこのなき  
 難波かたみしかきあごのふしの間もあは<sup>もなみイ</sup>此世をすくむよさや

毛もなみのよするいはをまをこく舟の敷かちをはまなくたもほゆるかな  
沖つもをさちてややまんほののと舟出せしことは何によりてそ  
新敷 みやま本のかけののこくきはわれなれや露もけされしる人のなき  
浦ちかみ波のたちよるさされ石のなかのたもひはむるやしらすや  
はちす葉のうきはのしたにたつなみのきみに心はよせてこそふれ  
新敷 山川のかすみへたて置ほのかにも見しはかりにやこひしかるらん  
ゆふされは道たさやみし月まちてかへれわかせこそそのまにもみん  
山みつを手にむすひてもこころみぬるくは石のなかもたのまし  
あまつかせ雲ふきみたれひさかたの月のかくるさみちまごふへく  
しるらめやわか衣手はあきさきりのたほつかなくてふるにぬるとは  
けふありてあすはきえぬる露のみのたもひたくへき言の葉もかな  
卵の花のほふさかりの月きまみいねすきけとやなくほささきす

ひとこゑをい  
こゑをたにきとての後ほほささきすあはぬさ月はあらしこそ思ふ  
きく聲をなかくさ思はほほささきすいむ五月をはすくしやはせぬ  
人のかへりこそせさりければかへてを折りてむくれ

新古 言の葉のうつろふたにもあるものをいささ時雨のふりまさるらん  
かへし  
時雨にもぬれさ濡ぬる言の葉はかすなからたにちらすもあらなん  
土御門の中納言の家のごなりにすむころそのいへの  
はなのちるを見ていひやる  
かきこしに見れともあかぬうめすさくらの花ねなから風のふきもこさなん

梅さくら花のはなうゑてわれのみ見むごかはなりなりあるきりも人やするごとて

かりそめにそめさらまじを磨ころもかへらぬ色をうらみつるかな

身にしみてふかくしなればかたはから衣かへすたこそたそしらたれさりけれ

ぬきとめぬかみのすちもてあやしくもへにける年の数をしるかな

つれ／＼の春ひたすらになかむればたつ白あわの目まのま

へにせせげさせかれすななかれつと我身はあわさうかひつと

かなきかになわひをれはみもじるもるもうくひすのゆきか

てにのみそなく聲はけかたぢむきもなくたえぬあひかたぢ

はぬ鳥たほもひごのあはれはえるものをはかくもつらきか

ははま千ごりあごふみたれは山ひこのこたふはかりを

さにして心ごはねはゆくふねのほにあけてこそへうらみら

れけれそすはるさはらるしまるさしりのまよきのまよきの

七條の后うせたまひてのうちは年へてすみえいせの

沖つなみあれのみまさる宮のうちは年へてすみえいせの

あまも舟なかしたるまちあしてはよらんかたなくきかなじき

になみたの色のくれなはたのかちり／＼わかれなはたのむ

きの紅葉さらひごはたのかちり／＼わかれなはたのむ

かけなくなりはてまさまるものごは花すききみなきに

はにむれたちて空をまねかははつかりのなきわたりの  
 よそにぞそ見めと心そまごはるとちかからぬけのうきなきなりけり  
 後 かけみれはひさと心そまごはるとちかからぬけのうきなきなりけり  
 後 なく風のしたの塵にもあらなくにさも立ちやすきわかなき名かな  
 後 見えもせぬふがきさるをかたりては人にかちぬと思ふものは  
 後 かけてたに我身のうへとたもひきやこんごし春のはなを見しごは  
 拾 ほととすすねくらなからの聲きけは草のまくらそつゆけかりける  
 拾 うみにのみみちたる松の深みさりいくしほさかはしるへかりける  
 拾 わたつみの沖中にひのはなれ出てくもゆき見ゆるは雲のいさりか  
 拾 そらめをそきみはみたらむ河の水あさしやふかえそれほわれかは

拾 ごとし月のゆくらんかたもたもほえす秋のはつかにひごの見ゆれは  
 拾 ともひきやあひみるほごの年月をかそふはかりにならんものごは  
 拾 はるかなるほごにもかよふ心かなさりとてひごのしらぬものゆゑ

新編

新古

片しきのころも手さむきまつかせに秋のゆふへごしらせすもかな  
 みつのたもにあやたりみたる春雨や山のみごりをなへてそむらん  
 山かせはふけごふかねごしらなみのよする岩ねはひさしかりけり  
 ひごりのみぬるごこなつの露けさはなみたにさへや色をそふらん  
 夕されはいごひかたきわかそてにやごる月さへぬるごかほなる

あつさ弓はるやまちかく家居してたえすきくらんうくひすのこゑ  
うちなひき春さりくれはしかすかに空くもりあひて雪はふりつ  
櫻はなさきちりくらししかすかにしらゆきに似てにはにふりつ  
まきむくのひはらにたてるはる霞はれぬたもひにわかになつまめや  
こらかてをまきもく山に春くれはこの葉のきてかすみたなひく  
春かすみわかれてさもにあをやきの枝くひもちてうくひすなきつ  
かけろふの夕さりくれはかりひこの弓親かたけにかすみたなひく  
むらさきのねはふ横野の春の野にきみをこひつきうくひすそなく

赤いの人集

あつさ弓はるやまちかく家居してたえすきくらんうくひすのこゑ  
うちなひき春さりくれはしかすかに空くもりあひて雪はふりつ  
櫻はなさきちりくらししかすかにしらゆきに似てにはにふりつ  
まきむくのひはらにたてるはる霞はれぬたもひにわかになつまめや  
こらかてをまきもく山に春くれはこの葉のきてかすみたなひく  
春かすみわかれてさもにあをやきの枝くひもちてうくひすなきつ  
かけろふの夕さりくれはかりひこの弓親かたけにかすみたなひく  
むらさきのねはふ横野の春の野にきみをこひつきうくひすそなく



我せこをならしのやまのまふこ馬きみよひかへせ夜のふけぬまに  
あさこごにきなくはこ馬なくたにも君にこふらしこなへてなく  
ふゆこもりはるたちきらも足引のやまにも野にもうくひすなきつ  
春なれば妻やもさむるうくひすの木す蒸つたひてなきつゝわたる  
かすかなるはかひ山よりさほのうへさしてなくなるたれよふこ馬  
こたへぬによひなをかこ呼子こりさほの山邊をのほりくたりに  
朝つゆにしこごにぬれてきけんこり神なひやまになきわたるなり  
いまさらに雪ふらめやもかけらふのもゆる春日さなりにしもの  
ふときつもゆきはふれこも<sup>りつ</sup>かすかに震たなひくはるは來ぬらし  
山きはにうくひすなきてうちなひきはるこたもへは雪ふりしきぬ  
みねの上<sup>に</sup>ふりたぐ雪は風の音もごもにちるらしはるはありこも  
つくは山をよめる

君かためやまたのさはに急くつむご雪けのみつにもすそぬらしつ  
うめかえになきてうつろふうくひすの羽しろたへにあわ雪そふる  
山たかみふりくるゆきをうめの花ちりかもくるこたもひゆるかな  
此うたはよみかはせる震をえいす  
きのふこそ年はくれじかはるかすみかすかの山にはやたちけり  
冬すきてはるそ來ぬらし朝日さす志賀のやまへにかすみたなひく  
あつさゆみはるたちぬらし春日山かすみたなひくよめに見れこも  
しもかれのなかの柳ははるひこもかつらにすへくたもほゆるかな  
あさみこりそめかけたりこ見るまてにはるの柳はもえにけるかな  
朝な<sup>く</sup>わか見るやなきうくひすのきあてなくへき時にはなりぬ  
あをやきの糸のほそきをはる風にみだれるいろに見せんこそせし  
さくら花をりてもみれはわかやこのやなきの眉もあはれなるかな

はなをえいす  
 うくひすかこつたふ枝のうつりかはさくらの花のさきかたつきぬ  
 さくらはな時はすきねご見る人のこひはさかりさいまやなるらん  
 我させるやなきのいごをふきみたる風にや妹かさくらはちるらん  
 こじこごに梅はさけごもうつせみの世にわれしもそ春なかりける  
 うちつけにごは思へごもはじめてもまつ見まほじきうめの初はな  
 あの山のさくら木のはなけふもかもちりみたるらんみる人なしに  
 かはつなく吉野のやまのたきの上にあせみの花そさきてあたなる  
 春のきしなくたにもごにさくら花ちりぬへらなる見るひさなしに  
 はるさめにあらそひかねて我やごのさくらの花はさきそめにけり  
 はるさめはいたくなふりそさくら花またみぬ人にちらまくもをし  
 春雨にちらまくをしきうめのはなしはじさかえんをじみてじかな

新

はるの野にすみれつみにごご我そのをなつかしみ一夜ねにける  
 いつし<sup>そてたれていさわかやごに</sup>かもこよひあけなんうくひすの木つたひちらす梅の花みん  
 見わたせは春日の野へにかすみたちひらくる花はさくららはなかも  
 よご川のみな<sup>そこまでにちる</sup>うきすゑになるまてにみかさの山はあけ<sup>さき</sup>にけるかも  
 今日みれはまた冬なるをしかすかに春かすみたつゆきはふりつと  
 こそさきし花はいまさちいたつらにつちにやちらん見る人なしに  
 あさ霞はる日くれなは木のまよりうつろふつきをいつかたのまん  
 春かすみたなひくけふのゆふ月夜きまてちなんたかまごのやま  
 はるくれは木かくれたほきゆふ月よれほつかなしや山かけにして  
 あめをえいす  
 はるの雨にありけるものをたちわかれ妹か家路にこの日くらしつ

春日野にかすみたつめりあをしかははるの花ほきに雨のふるかも  
野にあそぶふたはるのさきかたはるのさきかたはるのさきかたはるの  
はるの野に心のへんと思ふとちこし今日のひはくれすもあらなん  
もさしきの大みやひこはいとまあれや櫻かさしてけふもくらむつ  
あへるをまるこふのまもるのまもるのまもるのまもるのまもるの  
住吉のささゆ来しかははつはなのいとまれに見ん君にあへるかも  
かうへをめぐらすゆかたのまもるのまもるのまもるのまもるのまもるの  
春日なる三笠の山の月も出ぬかも關山にさける櫻の花も見るへく  
ふゆはすき春はきぬれごさむ月をあらたまれごもひごはふゆゆ  
はる山にゐるうくひすのあひぬれ○かへるまつまの思ひするかな

わかやこの木の下つくよ妹かため雲はこさろよしうたてこのころ  
我宿のはるさくはなのごしごにたもひはますごわすれめやわれ  
うめのはなさきちる野邊にわれゆかん妹かつかひは我をまつらん  
藤なみのさく野へここにはふくすのわれはよはひは久しくもあれ  
はるの野にかすみたなひく櫻はなうちなるまてにあはぬきみかな  
わかせこを我こふらんはたぐやまのあせみの花のいまさかりなる  
梅のはなしたりやなきにこきませて花にそふるはきみにあるかも  
女郎花さく野にたふるしらつよししらぬごもていひしわかご  
はるたては草木のうへにたぐ霜のきつとわれはこひやわたらん  
かすみによすはるのさきかたはるのさきかたはるのさきかたはるの  
春かすみ山にたなひきかくすいもを逢ひみてのちを戀しかりける

はるかすみたちにし日より今日までにわか戀やます人めしけきにあをつら春をたえぬさ春の日にかすみたちまふけふはくらしつたにこえやいもさたもふさかすみたち春の目くらしこひわたる哉見わたせは春日の野邊にたつかすみたてれぬれとも君かこころにこひつともけふはくらしつ霞たつあすのはる目をいかてくらさん雨によす我せこにこひてすへなき春さめのふるわさむらすいてくるかもはる立てはしはしわか戀わたつうみのたつ白波にあへそまされるたほつかな君にあひみてすかのねのなかき春日をこひわたるかな今さらにきみはよもこし春さめのころをひこのしらさならなくにはるさめのころも人はしりぬらん七日しふらはなと夜こしとや梅のはならす春さめたほくふるたひにやいもかいへるをるらん

くにすらかわかなつまんどしめし野にあまの君かよきりころひしらま弓いまはるの野にゆく雲のゆきやわかれんこひしきものをあを山のあせみの花のにくからぬきみにはしめやよかれはこひえいそのかみふるのやしろのすきにしを我さらしに戀にあひたる朝戸いて君かすかたをよく見すはなかきはるひを戀やわたらん

さのかたは身にならずとも春にのみさきてなみせそこひの草そも  
さのかたはみになりにしにいま更に春雨ふるへしはなさかんやは  
梓ゆみひきつへき夜はなつかきのはなさくまでに逢はぬきみかな  
かはかみのいつもの浦のいつもくきませ我せそたえすまつはた  
春雨のやますふりたちてわかこふる我いもひさにあはぬころかな  
わか妹をこひつゝをれははる雨のたれもるごてかやますふりつゝ  
はるくれはまつなく鳥のこゑのこごまつさきたちし君しまたるゝ  
相たもはぬ人をやつねにすかのねのなかき春日をこひやくらさん  
あひ思はすあらんか故に玉のをのなかきはるひをなけきくらしつ  
あひまたこひうたのうたのうたのうたのうたのうたのうたのうた  
春かすみたなひく野邊に我ひけるつなはまをつなたえんと思ふな  
あひまた夏雑歌をもをえいすうたのうたのうたのうたのうたのうた

ますらをのうたにてたちかきふくしめのをさす神なひ山にもあけた  
てはけくは野さひたにゆふされはこちものすゑにけきすくま  
うひええさかまなかるなにごまのうたのうたのうたのうたのうた  
あひまた反歌のうたのうたのうたのうたのうたのうたのうたのうた  
旅にいて妻こひすらえほさきすかみなひ山にさ夜ふけてなく  
あひまたこれにふるうたのなかにいれたり山にうたのうたのうたのうた  
ほさきすなくはつ聲はわれきかんさ月のたまにまきてぬきてん  
朝きりのたなひく野邊にあしひきの山ほさきすいつ来てかなく  
あしひきのやへ山こえてまふ子鳥なくやなかるゝやくならなくに  
藤波のちちまくをえきほさきすいまきのをかになきて行くらん  
あさきりのやへ山こえてほさきすうの花かくれなきてゆくなり  
木かくれて妹かかきねにほさきすなきひゝかして聲やまごはん

あひかたき君にあへる時ほごきすいつこを家こなきわたるらん  
月きよみなく時鳥みんごたもふわかさごもやある見んひごもかな  
ほごきすけさの朝きりなきつるを君またきかすいやはねつらん  
ほごきす花たちはなの下にねてなきしひらけははなはちりつる  
五月やまうのはなつく夜ほごきすなけごもあかす又もなかなん  
よひのまはねほつかなきをほごきすなくなる聲の音のさやけさ  
卵花のさくまををしきほごきす野にいて山にいてをれかなきかす  
山里になきてまつらんほごきすなかなくごこのなきもたもほゆ  
ものたもふごねさる朝けにほごきすわか衣手にきなきをりつる  
もごつ人ほごきすをや稀に見んいさやなつきてよひつるをれは  
たちはなのはやちの中にほごきすつねに冬まですみわたるへく  
朝はれのくも間にたくふほごきすかすかをさして命なきわたる

かくはかり雨のふるをやほごきすうのはな山になほかなくらん  
せみをえいす  
たごならん折になかなんうつせみの物思ふを身になきつるをる  
はしはみをえいす  
たもふらんごころも空にほひぬごしまのはしはみ秋たごねごも  
詠花  
風にちる花たちはなを手にうけてきみかみためごたもひぬるかな  
かくはしき花たちはなを花にぬひたごんものをいつごか頼まん  
ほごきすなきてひごかすたちはなの花あるやごにくる人やたれ  
我やごのはなたちはなはちりにけりくやしきごごにあへる君かな  
のへ見れはなてしごの花ちりにけりわかまつ秋はあかつきにけり  
我妹子があふちのはなは散りにけり妹はきけるかごご有ごかさく

かすか野の藤はちりにき何をかもみかりのひこのをりてかささん  
時ならて玉をそぬける卵のはなのあかつきはまたちりはてぬへし  
この花のさけるかさねはほこきすなきてそわたる人はきまつや  
きまつやと君にこひつとほこきすぬれつと今そなきわたるなる  
人ここはなつ野のくさこしけくとも妹ごわれごしたつさはりなは  
このころの戀のしけらんなつ草のかりはらへともたひむけること  
たくひあらはふなつのむけみかくこひはほこ我命つねならめやは  
我のみやかく戀すらんかきつはたつくこいふ妹はいかあるらん  
たちはなの花ちるささにかよひなは山ほこきすひもかきらんか

夏なれはすこくなつなりほこきすほこきす妹にあはてきにける  
さつき山花たちはなにほこきすかつそふごきにあへるきみかも  
ほこきすなくやさつきの短夜もひごりしぬれはあかしかねつも  
目くらしはごこはになけご君こひてたをやめりしを花はたまらす  
かたよりに糸をこそよれわかせごか花たちはなをぬくごたもひて  
ほこきすすかよふ垣ねのうのはなのうきごあれや君かきまさぬ  
卵の花のさくごはなしにあた人の戀やわたらんかたれもひにして  
われこそはにくもあらめわか宿のはなたち花を見にはこしごや  
人しれすごふれはくるしなてしこの花さきいてよあさな〜見ん

なつ草のつゆわけころもきもせぬに我ころも手のひるよしもなき  
 秋のさふの歌  
 天のかはみなそこまでもてらすふねつひに舟ひこいもこ見えすそ  
 久かたのあまの川原にぬるごものうらひれをりつくるむきまてに  
 わかこふる妹ははるかにゆく舟のすきてくへしやこもつてなみ  
 大空にたなひくあめのかすみれは人のつまゆくわれにあひぬへし  
 あまのかはやすのかはらに舟うけて秋をまつごはいもつけよごて  
 そらよりもかよふ我すらなれゆるゑにあまの川にそなつみてそくる  
 やちしほの神のみよよりいもなき人こしらせにきたりつけむも  
 わか應にほにあけてみんこよひ我あまの川はものいまはこもまご  
 社のかいもなかしごはきくつ手にまきて又きくてねよ君まきにこなし  
 天地ごわけごきよりわかいもにそひてしあれはかねをまつかな

なかこふるいもかすかたはあくまても袖ふりみえつ雲かきるまで  
 ぬは玉のよるくもくもゆぐらくごも妹かごををははやくつけてよ  
 夕つつくにかよふそらまていつごてかあふきてまたんつき人をごこ  
 あまのかは水かけくさのふく風になひくご見れはあきはきにけり  
 我またぬあきはきさきぬ今たにもにほひかゆかんならしかてちに  
 わかせこにうらひれをれはあまの川ふねさきわたす音きごゆなり  
 天のかはこそそのわたりのうつろへはかあはさせせをふひまにいゆきてよそ更にける  
 むかしわかあけてころもをかへさねは天のかはらに年そへにける  
 天の川よふねうかひて明ぬれごもあはんごたもふたもごかへさん  
 さほき妹ご手まくらやすくねぬる夜は庭鳥なくなあけはすくごも  
 あひ見まであれごもあかす東雲のあけにけらしなふなてせんいも  
 よろつよをたつさはりあてあひみんす思ふへしやは應すらなくに



よろつ代をへたつる雲さくもかくれくるしき物をあはんと思へは  
 白くもをいくへへたてきこひくこもゆふかけてみん君かあたりを  
 我ためにたなはたつめのこの宿にたるもらぬ○はたひこかんかも  
 きみにあはて久しくなりぬたりきせしるたへ衣あかつくまでに  
 天のかはかちたごきこゆひこ星のたなはたつめさこよひあふらし  
 あきたちて川きりわたる天のかはむかひにゐつこよる日そなき  
 一年になぬかの夜のみあふ人のこよひもあはねはよふけゆくかも  
 あまの川やすの河原にきたまりてかざるわかれはさくこまたなん  
 たなはたの糸をはたえてたる布はあきたつころも誰かこめてきん  
 年にありて妹にまたなんぬは玉のよるよりくもるさほきつなてを  
 わかまちし秋はきたりぬ妹せここなにこさあらんさしむかひゐて  
 あせすしてけななきものはあまの川へたてきまたやわか戀をせん

彦ほしとたなはたつめさこよひあふあまの川原になみたつなゆめ  
 あきかせのふきたるぬ夜の白雲はたなたはたつめのあきつきぬかも  
 しはくも違ひ見ぬきみはあまの川舟出はやせよ夜のふけぬまに  
 秋かせのきよきゆふへに天のかはふねこきわたるつきひをさこ  
 あまのかは霧たちわたるひこほしのかち音きこゆ夜のふけゆけは  
 きみか舟いさこきてこしあまの川きりたちわたるこのかはのせに  
 あき風にかはなみたつなたしはしやそふねのへにみ舟さめん  
 秋かせにかはかせきよしひこ星の今朝こくふねになみのさわくは  
 あまのかは川邊にたちて我まちしきみきたるなりひもさきてまで  
 天のかは川せにましてこしつきを懸ひつるいもにこよひあふかも  
 あすからはわか玉ゆかをうちはらひ君さふたりはねすなりぬへし  
 あまの原ゆきてやいもさしらまゆみひきてかくせる月ひをさこ

新古

このゆふへふりくる雨はひこほしのさくく舟のかいのしづくか  
 天のかはやそせまゆあふ彦ほしのさきにゆくふねいまやくくらん  
 かせふきて川なみたあぬこく舟にわたりもきませ夜のふけぬまに  
 天川うちははわたりすいもかいへちへて我れもふ妹にあへる夜はや  
 ますかよはん時またすとも  
 天のかはうちははわたりす妹かいへちまらすかまへときまたすとも  
 つきをへて我れもふいもにあへる夜は此なぬかひの月をさるかも  
 としにもてわかふねわたる天のかはかせはふくとも波たつなゆめ  
 天のかはかせはふくともわか舟はさくこきよせよ夜のふけぬとき  
 よしこよひ逢へる時たにこきよはんまもせすらも夜も更にけり  
 あまの川しらなみたか又わかこふる君かふなてはいまそすらも  
 春かすみきみまちかねて天のかはうちははわたりすきみに逢はすは

わたるイ

あまのかは霧たちわたりたなはたの雲のころものあへるそらがな  
 いにしへのねりにしはたを此ゆふへころもにぬひて君まつわれを  
 あし玉も手たまもゆらにねるはたを君かころもにぬひきせんかも  
 よきつき目あふよしあれは別路のをしかるきみはあすさへもかな  
 天のかはわたるをふかくふねうけてさしくる君かかちねこそする  
 あまのはら夜ふかくなれはあまの川霧たちわたりよふかかへるへし  
 あまの川わたるせこのみてくらのごころは君をゆきて見んこそ  
 又かたのあまのかはらに舟うけてきみまつよるはあけてまたなん  
 あまのかは足ぬれわたる君かみもまくらもせぬは夜のあけぬかも  
 わたし守ふねわたしをこよふ聲のゆかぬなるへしかちねこのせぬ  
 此うたは人丸か集にあり  
 天の川われむきたちてこふらくにこごたにつけんつまこごむなは

こひしきはけななき物を今たにもこもしむへしやあふへき夜たに  
まけなかく川にむかひてありし袖こよひむかんこたもひしかよさ  
天のかはわたりせ<sup>る</sup>ここのしつらし雲のしるしのありさたもへは  
ひごさへやみつからくらむ彦ほしのいもよふ澤のちかつきぬるを  
あまのかはせをはやみ見んぬは玉のよるはあけつゝあはぬひこ星  
わたし守ふねはやわたせひごせに二たひかよふみちならなくに  
戀するはけななき物をこよひたにくるゝへしやはごくあけすして  
たなはたのこよひあけなは常のここあすをもまたて年はこえなん  
天の川たなはたわたすたなはたのこれわたさんなたなはたわたせ  
あまのかはこごうちやりついつれをか君かかけをもわれまちわか  
秋風のふきにし日よりあまのはら瀬にたちいてまつこつけこせ  
あまの川こそそのわたりのありけるをきみかきたらん道のしらなく

ひこほしの妹よふこゑのひくつなのたえんど君をわれ思はなくに  
わたしもり舟出しゆかんこよひのみあひみてのちはあはぬ物かは

長歌

天地のそめし時よりあまのかはいかんかひすへてひご  
せにふたひあはぬ妻こひにものたもふ人は天のかは  
やすのかはらにありかまふわたりにくほふねのこもにもへ  
にもふなよそふまかちしけぬきはたあらしもこはくもよ  
にあきかせのふきくるよひに天の川しらなみしのき  
ちたきるはやをわたり若くさのつまたまくらにたほ舟  
のたもひたのみてこきくこもこのをのこらかあら玉のこ  
しのをなかくたもひこ戀はつきなんふん月のなぬかの  
よひはわれもかなしも

かへし歌  
こまにえきひもごきやすきあま人のつままつよひそ我も木もはん  
あめつちごわけし時よりひさかたのあましるしごて大さ  
みの天のかはらにあら玉の月をかきねてわきもこに  
ふ時まつごたあまちにかわころも手をあき風のふきしか  
へさはたあまてたきつをしらすむらきものこころもほ  
ごすごききぬの木もひみたれていつかごもわかまつよひ  
の此かはのゆきてなかくもありえたるかもたおま  
天の川かはよごさらすたつきりの木もひすくへきごならなくに  
春たはわかかなつまんごしめし野にきのふもけふも雪はふりつ

けさゝりてあすはきなんごいひしかごかさつきやまに霞たなひく  
こらか名につけのよろしきあさつまのかた山きしにかすみたな引  
柿本人丸歌ごそ

新敷  
うちなひきはるたちぬらしわか宿のやなきの枝にうくひすなくも  
やまもごに雪はふりつししかすかにこの川やなきもえにけるかも  
花はさきうめはちらねごなかくに木もほゆるかな山ふきのはな  
ふちなみのさく春の野にはふくすのしたよのこひは久しくもあり  
はるの野にかすみたなひく櫻はなくなるまでにあはぬきみかな  
さくらはな我はちらさてあをによしみやこの人のきつ見にしそ  
たまきはるわか山の上にあたつかすみたちてもあても君かまに  
ほごきすいごふ時なくあやめ草かさん日よりこごになかなん  
ひこ星かうらむる妹かごたにもつけにそきつる今日はくるしも

なかくこふる妹かすかたはあくまで袖ふりはへてくもかとりまく  
我がかへすかちさをなくはわたし守ふねかさんやはしはらくのまも  
あきすきてかけにもせんを故郷のはなたちはなも散りにけるかも

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

遍 昭 集

春

古花のいろはかすみセイにこめて見えすこもかをたにぬすめ春の山かせ

西寺の柳を

古あさみごり来よりかけてしら露をたまにもぬけるはるのやなきか

二月はかりみちをまかるこて

後をりつれはたふさにけかるたてなからみよの佛にはなたてまつる

やまごのふるの山をまかるこて

後いそのかみふるの山邊のさくら花うゑけんこきを知るひこそなき

雲林院のみこひえの舍利會にのほりてかへりたまひ

けるに

古山かせにさくらふきまきみたれなんはなのまきれに君たちごまるへく

春花山に法皇のみゆきありてごくかへらせ給ひなん

こせしごき

古まてこいはういごもかしこし花の山しはしごなかむ馬のねもかな

たなし山に人のいりてゆふかたまかりかへりなんご

せしかは

古夕くれのまかきは山ご見えなうんよるはこえしごやごりごるへく

たいしらす

いまこんごいひてわかれし朝よりたもひくらしの音をのみそなく

うちわたりに侍りしごき人にこんごたのめて夜ふく

るほごにうしみつごそうするをきうてをんなのもご

より

拾人こころうしみつ今はたのまじよ

ごいひ侍りしかは

拾ゆめに見ゆやさねそすきにける

五節のころ舞ひめを見侍りて

古あまつかせくものかよひちふきごちよをさめの姿しはし見るへく

なにくれごいひありき侍りしほごにつかうまつりし

深草のみかさかくれたはしましてかはらむ世をみむ

もたへかたくかなしくら人頭中將なごいひてよるひ

るなれつかうまつりしなこりなからん世にまじらし

ごてにはかに家のひごにもしらせてひえにのほ

りてかしらねろし侍りしにもさすかにたやなごのこ

こは心にやかよりけん  
たらちねはかよれきてしもぬは玉のわか黒かみをなてすや有けん  
はしめて山ふみ侍りて

後 今さらに我はかへらしたき見つよへさきかすこはこたへよ

ふかくさの山にをさめたてまつりしをたもひまゐら  
せけんころの程たもひやるへし

ま うつせみはからを見つともなくさめつけふりたにたて深草のやま  
夕くれにくものいこはかなけにすかき侍るをみてつ

ねよりもあはれに侍りしかは

新古 さゝかにの空にすかくもたなしこごまたき宿にもいくよかはふる

よのはかなさいこゝたもひしられて侍りしかは

新古 すゑの露もこのしつくやよの中のたくれさきたつためしなるらん

なごたもひつゝけてまかりありきしほごに年もかへ  
りてもろごもに見し殿上人々あるはかうふりえある  
はつかさたまはりなごしてかはらにいて御ふくぬ  
くごころにあやしほうししてつかはし  
古 みな人ははなのころもになりぬなり苔のたもごよかわきたにせよ  
かくていつこごもなくありき侍りてはつせのみてら  
にさふらふほごにかたはらのつほねなる女の寺の僧  
をよひよせていふやうごころの人なうなりたるを  
いかにしてもあるものならば今ひごたひあひ見せた  
まへ身をもなけしにもしたらはみちをもなしたまへ  
たごごもかくも此人のありさまを夢にもうつゝにも  
みせしらせ給へてをここの具をたひたちなごまで

彌行にせさすこてえもいひやらすなくをはしめはな  
にひごならんごたもふほどに我うへにきくなしてち  
かくよりて猶きけはめのうへなりけり子ごもごそひ  
ていみしうなくいごかなしうてなそやはしりもいて  
なましごちたひたもへごもいみしうかへされてよも  
すからなきあかしたるごころはみのなごもくれなる  
になんしみたりけるさてまた世にありごもきこえぬ  
を小野の小町ごもれりけるかたはらに經よむをたれ  
ならんごてつれな人して見せければみのひごつきた  
るほうしのさすかにあてやかなるなんすみの方にあ  
て侍るごいひければ耳をたてごきくにいごたふごく  
あはれなりたご人にはあらし少將のたいごここにやあ

らむごたもひていかさいふごてこのみてらになん侍  
るいごさむきを御こゑきこえ侍れはいごたのもしく  
なむみそひごつかしたまへごて  
後いはの上の旅ねをすれはいごさむし苔のころもをわれにかさなん  
ごいへるかへりごごはかりを  
後やまふしのこけの衣はたごひごへかさねはうごしいさふたりねん  
ごいへるたご少將なりけりごたもひてたごにもかた  
らひしなかなれは物いはんごたもひてたつねいきた  
りけれごふごうせにけりごきこしめして五條のきさ  
いの宮より内舍人を御つかひにて野山をたつねさせ  
たまひけりからくしてわりなくかくれたるごころに  
ゆくりなういりにければえかくれあへてあひぬみや



のたほせここになんみかこたはしまさぬにむつまじ  
くたほしめし人をつたに御かたみにこたもふへきを  
かく世にうせかくれたまひにたれはいさなんかなし  
きなごか山はやしにいるともこくにたにせうそこを  
いはさるさしきみさご在所にもたごせられさらむな  
れはいみしうなきてわふなるいかなるころにてか  
くものせらるごなむ侍りしかはこごかしこわりなり  
くたつね侍りてかしこくまありたるこいへはたほせ  
ここかしこまりてなむみかごかくれさせたまひての  
ち世にふへきこごちし侍らさりしかはかふる山のす  
ゑにこもりはへりてしなむをまち侍るにまたなんあ  
やしういきめくらひ侍るにいごかしこくごはせたま

人へるここわらはへのはへるごころも心にはさらにな  
すれはへらすごて

かきりなき雲居のよそになりぬごも人をこころにたくらさんやはさらめや

ごなむ申つるごけいしたまへこいひける入道のかほ  
すかたいごなんかなしかりけるそのほごにもあらず  
なりてたごみのをのみなんきたりける少将なりしご  
ききよけなりしをたもひいてご悲しかりけるか  
た時ひごのあるへき所ならねはなくごかへりまる  
りてごごのよしかなせごけいせさすれは宮かしこ  
くしほたれさせたまひて御かへりつかはすに人々も  
みなせうそくつけてやりたまひけれごかくれにけれ  
はえたつねあはずなりにけれご僧正までなりて後の

ここにや仁和のみかさのまたみにわはしましきと  
きふるのたき御覽せんとてわはしましける道に過昭  
はるの家はへりけるにやどりたまへるに庭を秋の野  
につくりていさをかとう御ものかたりのついでによ  
みてたてまつりしぬる宿なれやにはもまかきも秋の野らなる  
古里はあれてひとはふりにぬる宿なれやにはもまかきも秋の野らなる  
ねなしみかさの御をはの八十の賀にしろかねをつゑ  
につくりてたてまつりたまひし時かのをはにかはり  
たてまつりてたてまつりて  
古ちはやふる神やきりけんつくからにあさせの扱もこえぬへらなり  
たいしらすあらい諸人のそこらいのりしむるああらはやそあのうき身につかい傳へさらめや

さかに侍りしほうしの房のまへにせんさいのはへり  
けるを女ごものたちとまりて見侍りしかはの  
かごきにしも何にほふらんをみなへし人のものいひさかにくき世に  
さうさうしく侍りしかはうまにのりてものなまかり  
む道にをみなへしの見えしを木よひて折しほどに馬うま  
より落ちてふしなから  
かなにめでし折れるはかりそをみなへし我れちにきと尺はかりかたるな  
古花ごみてをらんさすれは女郎花うたゝあるさまのなにこそ有けれ  
古秋の野になまめきたてるをみなへしあなごささも花もひびき  
ならへまかりける道にあれたる家に女のごとひきは  
ああへりしをきき侍りていひぬれ侍まりしははしき  
古わひ人のすむへき宿さみるなへになけきくはるごとの音そする

あきやまのあらしのすゑをさく時は木のはならねと物そかなしき

のこりのもみちを

がらにじぎ枝にひさむらのこれるは秋のかたみにたぎぬなりけり

雲林院の木かけにたぎすみありきて

むひ人のわきてたちよる木のもさはたのむかけなく紅葉ちりけり

くだにをたいにて

ちりぬれは襖はあふたになる花をむもひちちすもまごふてふかな

はもしをかみにてるもしをはてにてななかめをかく

花のなかめにあくやごてわけゆけはふろを共にちりぬへらなる

しかよりかへり侍りし人花山にけりてふちのはな見

侍りしかは

古よそにみてかへらん人にふちのはなはひまつはれよ枝どかむはかりにいはをるごも

はちすに露のたきたるを

古はちす葉のにこりにしまぬころもて何かは露をたまごあさむく

古我やはみちみえぬもなきまであれにけりつれなき人をまつごせしまに

古よをいごひこのもごここに立よりてうつふしそめの麻のけさなり

源中納言のたまへにちひさき紅梅を  
うゑたりけるをはしめて花さきたるごしよろこひて  
人々もしひごつをさくりてよむにこもしをたまはり  
てあはれはるのはしめは東よりさいふごごにしの  
宮よりなりけりごはこのうめの初はなを見てなんと  
おぼえごろかれけるこれにより我大臣のきみやまごごの  
はなをのこごもひきつらねてさふらはせたまひから竹の  
ふえのひごよあそひあかさせたまひかゝるふしをた  
ごにやはすくすへきごてこのこきのたひいてゝ萬代

源順集

西の四條の宮の源中納言のたまへにちひさき紅梅を  
うゑたりけるをはしめて花さきたるごしよろこひて  
人々もしひごつをさくりてよむにこもしをたまはり  
てあはれはるのはしめは東よりさいふごごにしの  
宮よりなりけりごはこのうめの初はなを見てなんと  
おぼえごろかれけるこれにより我大臣のきみやまごごの  
はなをのこごもひきつらねてさふらはせたまひから竹の  
ふえのひごよあそひあかさせたまひかゝるふしをた  
ごにやはすくすへきごてこのこきのたひいてゝ萬代

のたいた木にならんまでのことろはへをよませたまふ

しら波のしらぬ身なれど大よこのねほせここをはいかそむかん  
梅つかはこのくれよりそ流れてのうれしきせきはみえんみなそこ

あめつちの歌 四十八首

もさ藤原のありたとの朝臣藤六かへしなりかれ  
はかみのかきりにそのもしをすゑたりこれはしも

春

あらししとうちかへすらんをやまたの苗代みつにぬれてつくるあ  
めもはるに雪間もあをくなりにつけりいまふこそ野邊に若なつみてめ  
つくはやまさける櫻のにほひをはいりてをらねよそなからみつ

千くさにもほころふ花のにしきかないつら青やきぬひしいさすち  
ほのくさあかしのはまを見わたせは春のなみともいつる舟のほ  
しつくさへ梅のはなかさしるよかな雨にぬれしときみやかくし  
そらさむみ結ひしこほりうちさけていまやゆくらん春のたのみそ  
らにもかれきくもかれにし秋の野のもえにけるかなさほの山つら

夏

やまも野もなつ草しけくなりにけりなごかまたしきのへの菊かや  
まつ人もみえぬはなつもしら雪やなほふりしけるこしのしらやま  
かたこひに身をやきつとも夏蟲のあはれわひしきものをねもふか  
はつかにもたもひかけてはゆふたすきかもの川波たちよらしやは  
みをつめは物たもふらしほごときすなきのみまごふ五月雨のやみ  
ねをふかみまたあらはれぬあやめ草人をこひちにえこそはなれね

たれにより祈るせよにもあらなくにあさくいひなす大ぬさにはた  
 には見れはやほたてたひて荒にけりからくしてたに君かこはぬに  
 くれ竹のよさむに今はなりぬさやかりそめふしにころもかたしく  
 もかみ川いな舟のみはかよはすてたりのほりなほさわくあしかも  
 きのふこそゆきて見ぬ程いつのまにうつろひぬらんへの秋はき  
 りうたうも名のみなりけり秋の野のちくさの花のかにはたこれり  
 むすひきししら露をみるものなちはよるひかるてふ玉もなにせむ  
 ろもかちも舟もかよはぬあまの川たなはたわたるほこやいくひろ  
 このはのみふりしく秋はみちをなみわたりそわふる山かはのそこ  
 けさ見れはうつろひにけり女郎花われにまかせてあきははやゆけ  
 冬

ひをさむみこほりもごけぬ池水やうへはつれなくふかきわかこひ  
 こへさいひじんはありやさ重わけてたつねきつるそ三輪の山もこ  
 いつこごもいさやしら波たちぬれはしたなる草にかけるくものい  
 ぬるごごにころもをかへす冬の夜に夢にたにやはきみか見えこぬ  
 うちわたしまつあじろ木にいさひをのたえてよらぬはなそや心う  
 へひゆみのほるにもあらてちる花はゆきかさ山にいるひごにこへ  
 炭かまのもえこそわたれ冬さむみひごりたきひのよるはいもねす  
 思  
 ゆふされはいささわひむき大井川かより天なれやきえかへりもゆ  
 わすれすもたもほゆるかな朝な<sup>く</sup>ねしくろ髪のねくたれのたわ  
 ささかにのいをたにやすくねぬころは夢にも君にあひみぬかうさ

るり草の葉にたぐつゆの玉をさへものたもふ時はなみたごそ見る  
たもひをも戀をもせよにみそきするひごかたなてと我へてはたよ  
ふく風につけても人をたもふにはあまつそらにもありやとそよふ  
せをふちにさみたれかはのなりゆけはみをさへ海に思ひこそなせ  
よし野かはそこの岩なみいはてのみくるしや人をたちあふるよ  
えもいはて戀のみたるよこころかまざるわかみないつこやいはにたふる松のえ  
のこりなくたつるなみたは露けきをいつらむすひし草むらの野の  
えもせかぬ涙のかはのはてたやしひてこひもきやまちつくはえ  
をくら山はほつかなくもあひぬるかなくしかはかり戀しきものを  
なきたむるなみたは袖にみつじほのひるまにたにも遠見てしかな  
れうじにもあらぬ我こそ遠ぶ事まのともしのまつのもえこかれぬれ

あても戀ひふしてもこふるかひもなく影あさましくみえぬ山の井  
てる月ももるよ板間のあはぬ夜はぬれこそわたれかへすまされころも手

天曆御屏風歌 春立日

けふごくるこほりかへりて結ふらしちさせの春にあはんちきりを

天曆五年宣旨ありてはしめてやまごうたえらふ所を

なしつほにたかせたまひて古萬葉集よみごきえらは

しめ給ふなりめしをかふるは河内掾きよはらの元輔

近江掾紀時文讚波掾大中臣能宣學生源順御書所のあ

つかり坂上望城なり藏人左近衛少將藤原朝臣伊尹を

そのごころの別當にさためさせたまふに神無月のつ

こもりに御題を封じてくたし給へりかみなつきかき

りごや思ふもみち葉のごあり各歌をたてまつる

かみな月はてはもみちもいかなれや時雨ごごもにふりにふるらん  
 又くたしたまへる判にいはいくもみち葉のかみなつき  
 はてぬこたもひてちりすくるをはしりにけりいかな  
 れやこたほめてきたためなしすゑつかたたをやけきさ  
 まなれさなよ竹のよのふるごごにもなんなりにけ  
 る佐保山をはせまてによむ  
 千ごりなくさほの川きりさほやまの紅葉はかりはたちなかくしそ  
 西宮の源大納言の大饗日たてまつるれうに四尺屏風  
 あたらしくてうせらるるれうのうた  
 天元日  
 きふまで雪にこもりじみ吉野のかすみは今日やたちてそむらん  
 子日するごころを

岩にたふるねのひのまつも種しあれは千年のはるは我にたほせよ  
 二月はつうま稻荷の社にまうつる人に  
 いなり山をのへにたてるすきくにゆきかふ人のたえぬけふかな  
 あら田うつ所を  
 わりたてはうらまでひつる袂ゆるなにうちかへすあら田なるらん  
 二月はつうまのころ  
 いかにして花をはつましはなの香を袖につみつるつみもこそうれ  
 小弓いる所  
 春ふかきやごにいははやあつき弓ふくかせにさへはなのちるらん  
 四月神まつるごころ  
 神のますもりのした草かせふけはなひきてもみなまつるころかな  
 五月ごもしする所



若ほごきすまつにつけてやごもしする人も山へによをあかすらん  
 六月はらへするごころおぼひも丁もあまごころ  
 ねきごきかすあらふる神たにもけふはなごしご人はしらなん  
 七月七日七夕まつりする所  
 たなはたはそらにじるらんさゝかにのいごかくはかりまつる心を  
 十五日ほんもたせて山寺にまうつる所  
 けふのためをれるはちすの葉をひろみ露たぐやまに我はきにけり  
 八月あふさかの關にこまむかへの人々さゆる所  
 なにわわかよはに來つらんあふ坂のせきあけてこそ駒もひきけれ  
 八月つりごのに人々あつまりて月みるごころ  
 水のおもにやされる月のごきけきはなみゐて人もねぬよなればか  
 九月小鷹かりのごころ

里ごほみくれなは野邊にごまるへしいなむほせ鳥に宿やかからまし  
 月夜にきぬうつ所  
 かせさむみなくかりかねにあはすればよるの衣はうちまさりけり  
 十月志賀の山越の人々  
 名をきけはむかしなからの山なれごしくるところは色まさりけり  
 十一月賀茂の臨時祭に  
 ちはやふるかものかはきりきるなかにしるきはすれる衣なりけり  
 十二月佛名たこなふいへ  
 冬やまの雪まにこれるあはれ木のうへにそくゆるかくすつみなく  
 天徳四年三月三十日内裏の歌合のくたりかたはせ  
 によりてたてまつれる三首

二首  
 三首

こほりたにごまらぬ春のたにかせにまたうちごけぬうくひすの聲

歌冬工の歌

春ふかみゐてのかはなみたちかへり見てこそゆかめ山ふきのはな

たかために君をさふらんごひわひて我はわれにもあらずなりゆく

應和元年七月十一日四歳なる女こそをうしなひて同年

八月六日またいつくなるをのこ子をうしなひて無常

のたもひものこごにふれてたごるかなしひの涙かわかす

古萬葉集中に沙彌滿誓かよめるうたの中によのなか

をなにとたごへんごいへるごきをさりてかしらにた

きてよめる

世のなかをなにとたごへんあかねさす朝日まつまの萩の上のつゆ

よの中をなにとたごへん夕つゆもまたできえぬるあさかほのはな

よのなかを何にたごへんあすか川さためなき世にたきつ木のあわ

世のなかをなにとたごへんうたごねの夢路はかりにかよふ玉ほご

よの中をなにとたごへんふく風はゆくへもしらぬみねのじらくも

世のなかを何にたごへんみつはやみかつくつれゆくきしの臥まつ

よのなかを何にたごへん秋の野をほのかにてらすよひのいなつま

よの中をなにとたごへん江のそこからにならはでもやごる月かけ

世のなかをなにとたごへん草も木もかれゆくころのへの森の音

世中をなにとたごへんふゆの夜をふるを見るまにけぬるあわゆき

民部丞清原元輔たごりてたそくきたるよし元輔にいひやる

りてたそくきたるよし元輔にいひやる

よひのまの空のけふりさなりにけり天のはらからなごかつけぬ

よひのまの空のけふりさなりにけり天のはらからなごかつけぬ

よひのまの空のけふりさなりにけり天のはらからなごかつけぬ

よひのまの空のけふりさなりにけり天のはらからなごかつけぬ

よひのまの空のけふりさなりにけり天のはらからなごかつけぬ

よひのまの空のけふりさなりにけり天のはらからなごかつけぬ

よひのまの空のけふりさなりにけり天のはらからなごかつけぬ

よひのまの空のけふりさなりにけり天のはらからなごかつけぬ

よひのまの空のけふりさなりにけり天のはらからなごかつけぬ

よひのまの空のけふりさなりにけり天のはらからなごかつけぬ

應和元年勘解由判官の勞六年いにしへになすらふる  
 にかくしつめる人なしつかれたるうまの詩をつくり  
 てつかさの長官朝成朝臣にたまふはくはべたる長歌  
 あらたまの年のはたちにとらさりしはさきはの山のやまさ  
 むみかせもさはらぬふちころもふたゝひたちしあさきり  
 にささるも空にまごひそめみなしらなりしより物ねも  
 ふこのはをしけみけぬへき露のよはにたきて夏はなき  
 さにもえわたるほたるをそてにひろひつゝ冬ははなかさ  
 見えまかひこのまはにふりつもる雪をたもごにあつ  
 めつゝふみ見ていてし道はなほ身のうきにのみありけれ  
 はごともかじこもあしねはふしたにのみこそしつみけれ  
 たれごとのへのさは水になく鶴の音はひさかたの雲の

うへまでかくれなくたかくきこえてかひありさいひなか  
 ちけん我はなほかひもなきさにみつしほのよにはくらへ  
 てすみのえのまつはむなしくむいぬれさみさりのころも  
 ぬきかへんはるはいつさも白波のなみちにいたくゆきか  
 よひゆもさりあへすなりける舟のわれをし君しらは  
 あはれいまたにしつめしこあまのつりなはうちはへてひ  
 くさしきかは物はたもはし  
 應和二年五月正に東宮の藏人になりて月のうちに式民部  
 丞右にうつりてふたゝひまろこひありたもひをのへて  
 くら右の命婦にやる  
 昔ひく人もなしさわひつるあつさ弓いまそうれしきもろ矢しつれは  
 同年十一月前朱雀院のひめみやの御もきの日のれう

に御屏風てうせさせたまふ人々うだたてまつらせた

まふにまふにまふにまふにまふにまふにまふにまふにまふにまふに

春柳

露をたもみたえぬはかりの青柳はいくめかけたるさかねなるらん

四月うの花さける所

わかやこのかさねや春をへたつらんなつ来にけりこ見ゆるうの花

たほつかなゆくたひひこを誰さてか山ほささきすまつなのらん

池のほとりにつるたてり

池みつになひくたま葉のそさきよみ千代さへしるき鶴のかけかな

あしたつの影のみうかふいけ水はちよになるへきしるしこそみる

まほきかりを見る人

まほきかりを見る人

ささきはみ雲路かきわけ水くきのあさかこ見ゆるかりは来にけり

みなかみに時雨ふるらしやまかはのせにも紅葉のゆきふかくみゆ

五月あめふる日東宮にて雨降心のうたをたてまつる

こて木のつれももひごのをさくりまあもしをたまは

雨ふれはささ葉のつゆもまさりけり淀のわたりのたもほゆるかな

内裏にをんなみこたちの御礼うに月なみの繪かきし

あさめたまひ殿上人を歌ねへさせたまふあるひごのこささ

ふれうによめる

あさめたまひ殿上人を歌ねへさせたまふあるひごのこささ

おきき四月うの花さける室に郭公をまつ

ほごきすきか花はつ夜はあけにけりほのに卵花しろくみえゆく

九月大井川に人々あそぶにもみちち  
もみち葉をそま山かはにふきつめは身にもくれのあきは来にけり

人のいへに池に蓮たひねぬなはたひたり

はちすたにたひさちませは水の上に露たきけりさいかでこらまし

康保二年女五男八親王御所風歌

道ごほみひごもかよはぬうめの花きみにはかせやわきてつけつる

かりにくる人もこそあれはるの野に朝なくさむのちかくもある哉

山さくら木の元た風しこさるあらはかをのみつてよ花なららそ

うの花のをちまくほしき山さごにほとさきすさへまつとなくなり

わかひかんみあれにつけて祈ることなるく鈴もまつきこゆなり

みわたせは誓のたくなは名のみしてたつは鹽やくけふりなりけり

九月三十日の日男女のへにいでさもみちを見る心よさふ

いかなれは紅葉にもまたあかなくに秋はてぬさはけふをいふらん

あさこほりさげにけらな水のれ巻にやさる鳴鳥ゆきなくなり

雪のそらくるもくる毛なあつまちのゆきのかたもみえぬしら雪

旅のそらくるもくる毛なあつまちのゆきのかたもみえぬしら雪

源の予のたのなかに水をひくをこゝありのゆふもあまのうら  
こほ山にたねまきたけるひごよりものせきの水はもりまさるらん  
あまこ人の家のいけのほごりの藤のはなを赤浪のちよひ  
藤波のかひれるきもの松はたいてわかむらさきにいかてさくらん  
なつ山にをれる柳のはをむけみまつりまさるは今日にそありける  
さはみつになす鶴のねをたつねてやあやめの草をひきのひくらん  
夏くさにはちへかくれはあかたのあまつとみごはつゆやたくらん  
たなはたのさゆろをくみてあまの川をつぐに袖のひちぬへきかな

六月十五夜まひき  
けふもあれあふ阪山のやまのほにまついてきぬるもち月のさま  
今日をみて後こそしらめ菊のはなき女にたかはぬるこありさほ  
紅葉さへきよるあしろのをかけてたつむら波はからにむきかも  
みなかみにあらむくらも山川のせにももみちのはやく見ゆれば  
夜をさむみかせさへはらふ宿なればのされる君かつみもあらじな  
いにしへのためをひげはやちよまて命をのふるこまつなりけり  
右兵衛のかみたさきみの朝臣あたらしくてうする屏

風のたまたま吹きたるに  
 正月一日人の家にやりみつ梅花あり  
 こほりさる風につけつとすめのはなゆく水にさへにほふなりけり  
 春日すらなかるむつるさ妹こはくみせんごをれるはなくらしそ  
 えたしけみてにかけそめて青柳のいさまなくてもくらすけおかな  
 夏ころもきもこそまされねなくは神のひもろきさきてあやらん  
 わか駒のさきもみるさきあやめ草ひかぬさきにそけふはあけま  
 たははた六月はらへする所

岸波のたちかへるせはあせきよりなごしのみはらへそきすごやきくらん

七月七日庭に琴ひく人あり  
 この音のなぞやかひなきたなはたのあかぬ別をひきしとめねは  
 八月あふさかの關に駒むかふる人あり  
 むさし野の駒むかへにやせき山のかひあちこえけさ今日けさはきつらん

九月志賀の山こえの人々  
 山たろしのかせに紅葉のちるさきはさなみそまつ色つきにける  
 十月山さきに男きたる  
 やまさごにこころあはする人やあるご我はし鷹にかはりてそごふ

十一月あじろ  
 あさ氷さぐるあじろのひをなればよれごあわにそ見えわたりける  
 十二月佛名導師にかつけものする

わたつ海の底の名残もけさはあらしかつけはいかに髪ならずとも  
右近少将義孝加賀掾まさみちごころつご王皇まご歌のけさ  
十首をつのるまさみちまけてつくのふひせめてきたりけり  
中まかりてごふによつをさらすあさる春のくれさの髪もさ  
まはるる春のくれさの髪もさまはるる春のくれさの髪もさ  
ごころして風もふかなん花のちるかたへやはるもゆくごたつねん  
秋月詠實の山さ天の雲のいさななごころつご王皇まご歌のけさ  
又かたのそらさへすめあきの月いつれのにはにや日ちさるらん  
あはれでふ言の葉もごそきさえり花またでき戻なん露のかなんさ  
あひでのさひの髪もさまはるる春のくれさの髪もさ  
我ながらぐらへわひぬるごころかな今さへなほやさひをかるへき

宰相中將第一のこの後漢書の光武紀よみをへたる日  
わたりかゆの髪はほきにまうけてふみつくるまたの  
あしたにいはいひの心あるうたたてまつる  
おたいぬれはたなしごころそせられけれ君はちよませ君はちよませ  
藤大夫誠信のいへに五月朔ころ庚申するにあかつき  
になりてごりのなくをきうて女房いひいたす  
なく聲をとりたにかふる物ならはほごきすごそきうあかさまし  
これかかへりごころそせられけれ君はちよませ君はちよませ  
君きかはなけほごきす黒かみのふごきになれはわれもたごらす  
ある所にをごころをんなかたわきてたまへの庭の面に  
すごきをきらにをにくさのかうをみなへしかるか  
やなてしご小菫なごうゑさせたまひまつ蟲すゝ蟲を



はなたせたまふ人々にやかて其ものごもにつけてう  
たをたてまつらせたまふにわのかこゝろに我も  
あるはかきりなきすはまのいそつらにあしたつのを  
りあるかたをつくりて草をもたほし蟲をもなかせた  
りたほせこゝて花のありさま蟲のすかたはいつれ  
もいざわかしかめり歌のたごりまさりはさためてや  
はあるへき難してかさため申さすへきこたほせたま  
ふにこれかれ申前和泉守源順朝臣なんたほやけには  
なしつほの五人かうちにさためられみやにはたもこ  
ひこ八人かうちにさふらひし人なりこれをめしてこ  
そさためさせたまはんによろしからめごまうすによ

りてかねてそのこゝはなくて今夜すくましまめ  
このなんあるこゝてめしたりたみのつかさたすつき  
のたほいすけの君たちこなたかなたにさふらひたま  
ひかとのせうたちはなのまさみちによみあけさせし  
たかふの朝臣にこゝわらせ學生ためのりしてけふの  
ここをかきたかせたまふなかにためのりなんたなし  
みなもこゝいふへくもなくちくさに匂ふ花のあたり  
にはもき木のやうにてましりにくく侍れさやむこゝ  
なくさふらふへきみやまのふもこよりたひいてたる  
草のゆかりにてたほせこゝのいなひかたさになん心  
もこもにつゐにけるみつくきしてかきしるしてたて  
まつりたくその歌も順朝臣のさためまうせる判か

くなむ  
すとき

花のみなひもごく野邊にしのすときいかなる露かむすひたきけん

源すけまさの朝臣

あき風になひくゆふへの花すときほのかにまねくたちこまりなん

このすとき

の歌はすけまさかなひくまねくこいへる

わたりらうたけたるやうなりいましはしそれもひあ

はせましこなたしもなひきたるは花すきたま

まく葛のまくすなるへし

たまのをとみなへし人のたささらはぬくへきものを秋のしらつゆ

ありたの朝臣

くらふ山ふもこの野邊のをみなへしつゆの下よりうつしつるかな

このをみなへしの歌はありたの朝臣さか野をうち

すきてくらふ山にてもごめありきけんもちあきな

又やまごここにいひにくきこそそそへてはよめ

我妹子かをみなへしてふあたら名をたまのをにや

はむすひうつへき

萩

兵部君

さをしかのすたく麓のした萩はつゆこきこのかたくもあるかな

橘のもちきの朝臣

はきの葉にたくしら露のこまりせは花のかたみはたもはさらまし

此はきの歌はたれもくたなしさまなれどすたくな

こいへるわたりはすこしいひなれたりもちきの朝臣

のはきの葉にたくしらつゆのなごいへるわたりめつ  
らしからねごうためいたり露をうすみ下葉もいま  
たもみちねはあかくも見えすかちまけのほご

蘭

辨君

わかれゆく秋ををしらになく鹿はいのちをさへやごめかぬらん

もりのふの朝臣

あたし野の草むらにのみましりつるにほひは今やひとにしられん

此もりのふの朝臣ふんのあたし野は野の名たしかならね

はにやあらんありごしる人すくなしまたかみには名

も見えすしもにはなも見えて此うたことなることろ

なけれごもそへごころすくなきにいまひごもしくは

へてしらにごいへる所いますごしまされりおほつ

なあたしの見れははなもなし空に匂ふごいふはなに

そも

左衛門君

ごこなつの露うちはらふよひごごにくさのかうつる我たもごかな

源ためり

野邊ごごに花をしつめくさくのかうつるそてそつゆけかりける

此くさのうたさまはさいもすごしやはらさいはせて

はへるめりされごもかみのくさはもごのくさにてし

ものかうのみそへたれは人にかくれん人の身のみか

くれてたもてあらはするごちなんしけるごちくさ

のかうつるたもごもありけるをなごあさかほをかく

さるりけむ

しをに ひうかのかみ

たかさこの山のをしかは年をへてたなし名にこそたちよらしけれ

白くものかきりしをかもあききりのたてはやそらに山の見ゆらん

このしをにの歌はこれもかれもたなしやうなれさあ

ききりのたてはや空にやまの見ゆらんといへるわた

川きりのふもさをこめてたちぬれは空にそあきの

山はみえけるといへるふるここをたもひあはすれば

たごりになん見えけるふもさごも峯ごもみえす秋

きりのたあなはなごか空に見ゆへき

秋 すけのきみ

そよごなる秋のをきたになかりせはなにさつけてか風をしらまし

秋の葉のすゑにすかせの音よりそあきのふけゆくこそはしらるさ

此をきのうた身つからもひとこしてもよみあけさるに

秋のはをすゑにすかせの音たかみすゑこそかたは

すてはまされぬ

なて

やまかつのかきほの外にあきゆふの露にうつれるなてしこのはな

秋ふかく色うつりゆく野邊なからなほごこなつに見ゆるなてしこ

此なてしこの歌はいつれもいよいよよきはせい

めりたも秋もなほごこなつかしき野邊なからう

たかひたける露そはかなきと見ればはきもすこしま

けに見ゆけり 露子おひさる 長時おひさる すすき

かるかやし 秋の露子おひさる 秋の露子おひさる 秋の露子おひさる

ゆく秋のかせにみたきかるかやはしめゆふ露もごまらさりけり

移しうゑはつかのまもなくかる螢をみちよの敷をかそふはかりそ

此かるかやはたさのふかみちまのかすなごいへるわのけり

たり秋の野は菊螢にやはすこし春の野邊にさきけん

ものはなもれもひいてられける ことの葉はこはく

見ゆれだすまひ草つゆには育つるものにさりける

あはれふの露ふきむすふ木からしのみたれてもなく露のこえかな

橋まさみち

橋まさみち

秋かせにつゆをなみたごなく露のたもふごころをたれにさはまし

此うた露ふきむすふ木からしのなご雨を時雨こやい

ふへからんごいふをきこしめしてこれかれがなるこ

ごをいふごごをこそはためしにひかめこてご木から

しの秋ははつ風ふきぬるになごか雲居にがりのたご

せぬ又 わかやごのわさ田もいまたからなくにまた

きふきぬる木からしの風いひたるわたりのをひなれ

たるなごさたむるほごにまさみちまうすやう木から

しごは冬のかせをこそいへるのころのかせをいはご

冬のあらじを秋のはつ風ごいへるにやあらんそのわ

たりをこそさため申されぬごあるにつけてまたご

見たまふれは 風なく露のなみたになせる露よりもつ

雑・七・廿

ゆふきむすぶ風はまされりふこころさる歌ふりも  
 そもくじたかふなじつほにはならのみやこのふる  
 歌よみさきさきひたてまつりじさきにはすこじくれ  
 竹のよびもりてゆくすゑたのむ折もほへりまいは  
 くさのいほりに難波のうみのあじのけはのみむつら  
 ひでごもり侍ればすべわれふねのひく人もなきさ  
 にすてたかれたらんごちなんじけるうちはもこの  
 年ころはじらけゆくか及にはじもや根きなくさこの  
 のはもみながればてにけりかされは此うたごきまた  
 めまうさするさまいごいひじらすごさやうなりなほ  
 たまへにてさためさせたまはんやよがらぬさまうす  
 をきりてまさみちがま美すやうに霜が花のたきなくおまじ

さごはなのれさもをみなへしたはなほなひきけり今  
 日の判をみればごいひたはふれてまかりいでなんさ  
 するほごにみすのうちをきけはこつのすけたちはな  
 のなかきさいひし人のむすめこれかれさふらひて夜  
 のふけゆくまきにきやけさまさるべきさこのねをし  
 らへあはせたるにたまへの庭のたもをみれば月かけ  
 のたほろなるに花いろたにうちみたれたりかせの  
 よきむになりゆくに虫のこゑたもなきあはせたり  
 かきることをもをきしものひすて今ほまかりいで  
 なんごてはきの下露にころも手ぬるふもしらすたき  
 めてたほみきたふなりさきこしめしてにへごのより  
 はこのしやくくら人ささるのさうじき藤原のたかたも

して御くた物ねろし政所よりはなかきの権守源のあ  
 りたきの朝臣してさかなにたまふへきものをさま  
 づいろいろにたまへりこれにかれたまひあきて申  
 すやうまたあかぬものは御前の花の色蟲のこゑにな  
 んありけるなご申てやうまかり出ぬためのりひ  
 どりあくるまできふらひてきのふよりけふまでのこ  
 をかきしるしてたてまつりわく天祿といふこは  
 しまりて三とせの秋のなかはなる月のしもの十日に  
 いまふつかねきてのこごなりこの味あきふもす身  
 ずさおとけふすのささきもけあきこのすけけおけ  
 一品の宮と内と御こあそはるあふきつくひなりみや  
 まけたまひて七月七日にたてまつりたまふさまとす

果にたつるををつくせりあやのもんにもんしをもち  
 てはれる歌

あまつかせあふくさもゆめちりたつなこはたなはたのたれる衣そ  
 ひはさのにてきやをもてあそひてさくりてくもしを  
 えたり  
 うつろはん時やみわかんふゆの日の霜もひさつに見ゆるむらさく  
 右馬頭速度家頼にきたりやさりけるところもちつきの御  
 まひいぬる秋ひかすふゆにのそみてひきつかふるひ  
 つかさの官人まゐりたるに御みきなごたまひての歌  
 君たにもあれたるやごにやさらずはよそに見まもち月のかけ  
 八月左大臣後院にて宴をなすよの歌

水上月

朝みつきよみやどれるあきの月さへやちよまて君ごすまんごすらん

ハき毛のほき刺のはなさきまの事

色ふかくさじのまにさける花あさきなみにはをられさゆけり

くさむらのそこまて月のてらせはやなく蟲の音のかくれさるらん

なかのみかごの家にみなみに申勢すむ亦月また梅の

とこえたにづきたるを折りて北の舞合にやるそのこは

にいはいくこののはまたかくなんのこりたるごすなは

ちいふこさろにはさよ丁あさひ丁ちうの丁まじき

あせきにもさはらす水のもるにあへはま介の梅つも残らさりけり

みなみのかへし

泉たにいにもすいのさうていかてもりにけんせきのふるくひくひもあかぬへぬにいご

北かへし

いつみにもあらぬまかきのしまちかみ波のこえつゝもるごこそきけ

うちこゆる波のたごせはもらぬよりしまきの風そふきかへさまじ

又その返し

花をこそひさやをるごもごかめしか敷ならぬみはなににかはせん

貞元元年初齋宮の侍従のくりやにたはするあひたに

八月二十五日ハイ庚申の夜入方まわりあひてあそふにい

はひのこ

かみ代より色もかはらぬたけかはのよをは君そかそへわたらん

同年の九月齋宮のさみやに齋裁うゑてまたよむ

たのもしな野のみや人のうとる花じくるゝつきにあすはなるごも

新古



このすたのかへし女房いひ出するも  
 明日よりは時雨にかさる花をうゑてのへやるへくもあらぬ秋かな  
 君かためやちよの秋はなけれはやのへやるへくもあらすといふらん  
 永観元年一條藤大納言寢殿障子にくにの名ある  
 ところのをゑにかけるかく歌  
 なにしたへはくもらさりけり鏡山うへこそなつのかけは見えけれ  
 大井川  
 大井かはそまにあき風さむけれはたついはなみもゆきここそ見れ  
 みつしほものほりかねてそかへるらし波さへたかき天のはしたて

やそしま  
 八十島をしまここにいかて見てしかな春のいたらぬ島はありやこ  
 うきしま  
 さためなき人のころにくらふれはたうき島はなのみなりけり  
 高砂  
 うちよする波をのへのまつ風をこゑたかさこやいつれなるらん  
 たほよ  
 伊勢の髪にさひはきかねと大流の濱のみるめはしるくそありける  
 しかすかのわたり  
 ゆきかよふ舟路はあれさしかすかのわたりは跡もなくそありける  
 はじめの冬のかのえさるの日の夜いせのいつきの宮  
 のさふらひにて松聲よるの琴にいるといふことを題

にてたてまつるうた 伊勢の齋のみや秋野の宮にわ  
たりたまひてのち冬のやま風さむくなりてのはしめ  
はつかなぬかの夜かのえさるにあたれりなかくし  
き夜をつくくごやあかすへきごたもほしてみすの  
うちにさふらふたもご入みはしのもごにまゐれるま  
うちきみたちに歌よませあそひしたまふ歌のたいに  
いはく松聲よるの琴にいるこれにつけてきけは足引  
山むろしにひくくなる松のふかみどりぬは玉のよは  
にきこゆる琴のたもしろさもひごへにみなみたれあ  
ひゆきまよひてうへ昔の人かせまつにいるごいふし  
八十歳らへをつくりたきつたへそめけんごたもほしける順  
かいらのかみ夏も冬もわかぬ雪かごあやまたれ心の

やみはからにもやまごにもすへてつきなく御まへの  
やり水にうかへる幾のよにたもひあはずれはいつ  
みはかりにむつめるみはつかしくなれたかききぬか  
さをかにある紅葉はを見わたせはかゝるまごゐにさ  
ふらふごさへまはゆけれごさもあらはあれよひご  
こそきとてそむりわらはめかけまくもかしこき御か  
みはあはれごもめくみさいはひたまひてん今のいに  
しへをのちの人も見よごてかきしるしてたてまつる  
はたほせごごにむたかふなり  
夜をさむみごごにしもいるまつ風は君にひかれて千代そふるらん  
天元二年の秋むろかなるをのこさたしをたひらのがさへ  
ねもりするかの守にてくたるにつくごてよめる歌二

時しもあれをかしのはを秋ゆけはあつまをさへそこひ渡るへき  
たもひわひたのかふねゆくを舟たこの浦まで見きぬといはすな

しもつさのかみ藤原のすゑたかか國にくたるに中納  
言中宮の大夫のいへにをのことも幾たまふによめる

きみははや人なみくにいてたちてしつみにしつむ我にあふなよ  
伊勢親子齋宮内親王の群行ののち長奉送使ひろわた

の中納言京にかへりたまふに齋王の御まへにて饗ま  
うけ祿たまふに男女うたよむにたてまつる

神のますやまたの原のつるのはこはかへるよりこそ千代はかそへめ  
天元元年十月はしめのみの日右大臣の女御の火をけ

にもちひくたものもりて内裏の女房につかはす大臣

此火をけひこつたてまつらせたまふしろかねしてあすよ入  
のこがめのかたをつくりてすゑさせたまへるくは

わたつ海のうきたる山馬をたふよりはうこきなきよをいたけや龜  
おなし年の五月にイ天元二年正月一條藤大納言いし山にまうてなぬか

さふらひたまふいへ人の詩つくりうたよむあまた侍  
りいごまのひまにからのうたつくりやまご歌よむた

ほかたかきあつめたるに侍従成信さはりありてつか  
うまつらす後にこの歌さもを見てみつかから思ひつく

りて加へてこれに又くはへよこすめられたるなか  
に三河の權守これむけの朝臣の江山此地深といふ詩

に客帆有月風千里仙洞無人鶴一雙とつくれると内記

ためのりの朝臣かなきさの松といふことをよめる  
老にけるなきさの松のふかみこりしつめるかけをまへ  
そにやは見るといへるふたつの和すといへるわか  
深みこりまつにもあらぬ朝あけのころもさへにそむつみそめけん

同年十二月のころほひ宣言にてたてまつる御屏風の

子日の野邊にあそふ人  
小松ひく人にはつれしふかみこり木たかきかけそ千代はまされる

あさこほりふきこく風はさむけれこいそきて梅ははやさきにけり

うめの香をかりにきてをる人やあると野への霞はたちかくすらん

はあひ入の家にくらやなきあり  
うくひすはわきてくれとも青柳の糸はさくちにみたれあひにけり  
花の木あまたあるしたに入々あそふやりみつあり  
山ふきのはなのしたみつさかねともみなくちなしと影そ見えける  
かは風はさへんかたなみ山ふきのちりゆくみつをせきやせめまし  
まつの木に藤かきれりをどこをんなむれるたりあ

住吉のきくのまつこそ木もほゆれ手にさへかきるふあなみのはな  
まつかせの音にききつる藤波はをりつるかへる名にこそありけれ  
むらさきのふちさく松の梢にはもこのみとも見えすそありける  
七月七日女にはにわたりたちてたなはたまつる男き

たつてまかきのもごにたてり  
ひこ星のまつごはなごになにすごてあまの川きりいそきたつらん  
たなはたにけさはかえつるあさ<sup>の</sup>をよるはまつるご人はしらすや  
天のかはわたし守にもなりてしかたなはたつめに今日をまたせし  
なにしたへはかさききの橋渡すなりわかると袖はなほやぬらん

八月十五夜入の家にはちすあり木のはるかふ月の

かけちたり男をんなごころにあそぶすたれ  
はちす葉ももみちもしける水のたもに底まで見よごてらす月かけ  
池<sup>い</sup>のたもにてる月なみをかそふれはこまひそ秋のもなかなりける  
月あかみこはひそ敷はかそへつるつねもしかたつきごはみれごも

あきの野にいろ／＼の花もみち散りまかふはやし

紅葉ゆるいへも忘れてあかすかなかへらは色やうすくなるごて  
池水にもみち散りうかふ水鳥あり馬にのれる人ゆ

きすく空の霧のなかにかりなきでわたる野にかり

あさ霧をわけゆくかりはなになれやたぐれて後にまごふけふかな  
水<sup>う</sup>のたもにうかふ紅葉のからにしきをこしてふ鳥そたごてあるらご  
此うたをたてまつらすついでにたほせうけたまは

る蔵人にやる

程もなきいつみはかりにしつむ身はいかなるつみのふかきなるらん

255  
247

あまつ風そらにふきあくる雲もあらは澤にそたつは鳴とつけなん  
 天元三年春能登になりてくたる一條大納言のいへの  
 人々饒する日のうた  
 この海にむれはゐることも都どりみやこのかたそこひむかるへき  
 神のますけたのみやま木しけくともわきていのらん君かちごせは  
 五日さうふにつけてあるごころにたてまつる  
 連上 深本  
 右葉之葛蒲草 千年五月五日可菊  
 ねご年もこそもごしもねごも昨日もけふもわかこふるきみ  
 かきたえてごはぬはうくもたもほえすかゝるにしなぬ身をいかにせん  
 連上 右葉之葛蒲草 千年五月五日可菊

明治四十二年六月十五日印刷  
 明治四十二年六月十八日發行

發行所  
 發兌元

東京本郷區千駄木林町一七二  
 (電話下谷二七四五ノ甲)

歌學書院

編者 中川恭次郎  
 發行者 田中増藏  
 印刷者 今井甚太郎  
 印刷所 歌學書院印刷部  
東京市本郷區駒込千駄木林町百七十二番地  
東京市本郷區駒込千駄木林町百七十二番地

終

